

WEB公開版

平成 22 年 度

日野市立教育センター紀要

第 7 集



日野市立教育センター

調査研究事業発表会（2月）



教育センター運営審議会（2月）



郷土教育研修会（7月）



わかば教室 e-ラーニング



e-ラーニング画面



理科実技研修会（8月）



目 次

あいさつ

「教育センター紀要第7集の発刊にあたって」	日野市立教育センター所長 篠原 昭 雄	・・・2
「教育センターへの期待」	日野市教育委員会教育長 米田 裕 治	・・・3
教育センターの部・係(担当)		・・・4

I 調査研究部の事業

1 教育経営係	「I C T教育推進研究」	・・・5
2 教科等教育係	「理科教育推進研究」	・・・9
3 ふるさと教育係	「郷土教育推進研究」	・・・19
4 基礎調査研究係	「ひのっ子教育21開発委員会の研究」	・・・29
5 教育資料・広報係		・・・41

II 研修部の事業

1 教職員研修係	今年度の教職員研修	・・・45
----------	-----------	-------

III 相談部の事業

1 一般教育相談係		・・・51
2 学校生活相談係		・・・63
3 学校生活相談係	「不登校児童・生徒への学習支援：eラーニングの実施」	・・・71

資 料

日野市立教育センター設置条例・施行規則	・・・75
日野市適応指導教室設置要綱	・・・78
編集後記	・・・80

教育センター紀要第7集の発刊にあたって

―日野市の新たな教育課題への挑戦―

日野市立教育センター所長 篠原 昭雄

開設されて7年、平成22年度の教育センター紀要は第7号になります。今年度は、新学習指導要領や日野市学校教育基本構想に基づく新たな教育課題への挑戦が求められました。教育センターの事業は、これらの課題やニーズに対する教育センターとしての役割という観点に立って設けられました。

調査研究部は、基本構想の「教育センターの先進的な調査研究の充実を図る」という基本方針とその施策を受け、シンクタンクとしての役割を果たすための活動を進めてきました。**基礎調査研究係**は、小学校外国語(英語)活動の導入に伴い、中学校英語教育との効果的な接続を図るための「ひのっ子教育21開発委員会」の研究に積極的に協力してきました。**教育経営係**は、これまで日野市の学校教育で特に力を入れてきたICT教育を推進するためのICT環境整備と授業への活用研究を、また**教科等教育係**も昨年に引き続き理科教育推進研究を更に深めその成果の普及を図っています。また、**ふるさと教育係**も、これまで5年間の郷土日野教育の研究を更に深めその成果の普及に努めています。これらの研究は、それぞれの教材(教育内容)の研究・開発や授業研究を深めるとともに、①ICT活用を含めていること、②市及び地域の教育力や施設を活用していること、③研究成果の実践・普及の観点から、実験・体験、フィールドワークなどの研修を取り入れていることに教育センターの研究としての特色があります。**教育資料・広報係**も情報センター的役割を目指して、教育研究資料の整備と普及、電子化による利用システムの整備を行ってきました。

研修部は、若手教員の増加とともに、それに伴う教職員の資質向上が求められていることから、所員の持つ豊かな教育力を活かし、学校課指導主事との連携を密にして教職員研修の充実を図ってきました。特に本年度は、諸研修に対する強力なサポートを行うとともに、初任者研修をはじめ授業力向上(2・3年次)研修、4年次研修、課題別研修などを担当し、実際の授業を通して個別的にも指導を行いました。

相談部では、**一般教育相談係**(教育相談室)において、利用者や相談のニーズの増加とこの問題の多様性・複雑化に応じるため、特別支援教育との関連にも配慮しながら、教育相談機能相互の連携を深めて相談事業の充実を図っています。**学校生活相談係**(適応指導「わかば」教室)も子どもを取り巻く環境の実情と変化及び課題の増加・複雑化に配慮し、ニーズに応える支援活動を行っています。また、昨年「わかば教室」で行ってきた通室者及び在宅児童・生徒を対象にした学習支援**e-ラーニング**の研究成果をもとに「手引き」に沿って実施しており成果を挙げています。

以上の諸事業の推進にあたっては、それぞれの趣旨・目的に向って多くの先生方や行政関係者のご支援をいただき、所員一同それぞれの課題に懸命に挑戦し取り入り組んできました。本紀要の内容には、このような取り組みが色濃く滲みでており、極めて中身のある充実した成果が含まれています。

最後になりましたが、教育センターの活動に賜りました日野市教育委員会、学校教職員、社会教育関係者並びに運営審議会委員の方々のご支援に対し、紀要第7集の発刊にあたって心から御礼申し上げます。

平成23年3月

教育センターへの期待

日野市教育長 米田 裕治

日野市では、不登校の子供たちへの支援を重要課題と位置付け、平成22年度に日野サ
ンライズ(登校支援)プロジェクトを立ち上げました。これは、不登校状態にある児童・生
徒の支援や保護者の支援、関係諸機関との連携を進め、日野市としてオールラウンドにか
かわりながら、児童・生徒の豊かな育成と次につながる支援を目指すものです。

プロジェクトでは、日野市の不登校児童・生徒の現状について把握するとともに、関係
機関の取組について意見交換し、よりよい支援の在り方を考えてきました。また、他県・
他市の不登校児童・生徒の支援体制について視察をし、効果的な取組について学びを深め
てきました。その中で改めて感じたことは、日野市のわかば教室、教育相談室、「e - ラー
ニング」を活用した学習支援が果たしている役割の大きさです。

「わかば教室」は、児童・生徒一人一人の抱える課題の把握に努め、グループ編成や学習
時間割を工夫し、一人一人に応じた指導・援助に努めています。わかばタイムの時間には、
音楽、図工、作文、栽培、スポーツを曜日ごとに行い、「土・人・命・文化に触れる活動」
を重視する中で、友達とのかかわりや栽培活動による収穫の喜び、育てた作物を調理して
味わう喜びを体感しています。また、年間を通して様々な行事や体験活動を実施し、通室
への高い意欲につなげています。児童・生徒が人とかかわりや学びへの意欲を見出し、
次のステップへ一歩を踏み出すには、自分らしくいられる居場所を見付け、心のエネルギ
ーを蓄える必要があります。わかば教室は、指導員やカウンセラーはじめ、スタッフによ
る細やかな指導により、児童・生徒の将来の社会的自立に向けた支援の場となっています。

教育相談室においても、不登校を主訴とする相談は最も多く、学校やわかば教室と連携
した質の高い相談は、児童・生徒のみならず、保護者への大きな助けとなっています。相
談内容によっては、学校や教員には相談しにくいケース、どこに相談すればよいか迷うケ
ースも考えられます。相談員は、スーパーバイザーを招聘した研修会や相談者へのアンケ
ートを生かし、専門性の向上と相談活動の充実に努めています。年間1700を超す相談
件数は、教育相談室の役割の大きさを示すものといえます。

「e - ラーニング」はつまずきのある教科を基礎から学び、各学年の教科の内容を進度
に応じて学習することにより、児童・生徒の学力への不安を軽減し、学校復帰や進級・進
路を考えるきっかけになっています。また、在宅の「e - ラーニング」では、登校支援員
による家庭訪問や電話による支援が、わかば教室への通室や在籍校への登校のきっかけに
もなっています。

このように、教育センターの不登校に対する取組は、児童・生徒や保護者の悩みをしっ
かりと受け止め、高い専門性に裏打ちされた相談活動や豊かな教育活動は、子供たちの将
来への希望につながる道を示すものです。今後も、学校、関係機関との連携を深めながら、
日野市の子供たちの健やかな成長をいっそう支えていただきますことを期待しております。

平成22年度 教育センターの部・係〈担当〉

所 長	篠 原 昭 雄
主任研究員 教育部参事	浮 須 勇 人
教育センター担当指導主事	小 林 邦 子
事 務 長	渡 辺 秀 樹

調査研究部

○印（係主担当）

●教育経営係	「I C T教育推進研究」	主任	○品 田 敏 男
			菊 川 民 雄
●教科等教育係	「理科教育推進研究」		○島 崎 忠 志
●ふるさと教育係	「郷土教育推進研究」		○小 杉 博 司
●基礎調査研究係	「ひのっ子教育21開発委員会研究」	主任	○河 野 和 昌
－英語活動・教育の小・中学校の効果的な接続－			
●教育資料・広報係	図書・資料の整理・貸出、所報・紀要の編集		○坂 井 洽 子
	センターHP・電子化等		○河 野 和 昌

研 修 部

●教職員研修係		主任	○原 田 由美子
〃			○二 馬 誠志郎
〃			品 田 敏 男
〃			依 田 明
〃			小 杉 博 司
〃			島 崎 忠 志

相 談 部

●一般教育相談係	教育相談、電話相談、学校等訪問、研修、『研究紀要』	主任	○依 田 明
〃	教育相談員(カウンセラー)		○望 月 桂
〃	〃		○織 田 順
〃	〃		○渡 辺 弥 生
〃	〃		○富 永 和 喜
●学校生活相談係	「適応指導(わかば)教室運営」	主任	○佐 藤 清 隆
〃	「 〃 」 (健全育成を含む)		○柳 元 太 郎
〃	「e-ラーニング」実施		○下 山 栄 子
〃	「 〃 」 (I C T教育推進を含む)		○菊 川 民 雄
〃	適応指導教室カウンセラー		○佐 藤 充
〃	〃		○中 島 理 恵
〃	(学校課出向)		○佐 原 澄 夫

事 務 部

●事務職員		○弘 田 裕 子
		○石 田 誠 孝
		○鷹 取 孝

A 調査研究部の事業

- 1 教育経営係
- 2 教科等教育係
- 3 ふるさと教育係
- 4 基礎調査研究係
- 5 教育資料・広報係



教育センター 理科室の整備

1 教育経営係

ICTを活用した教育の実践的な研究

ICT活用研究委員会

I 日野のICT活用教育は全国モデルになっている

日野市は、「ICT活用教育 日本一」を目指して、「教員一人に2台（授業用・校務用）のパソコン配備」「すべての学校に無線LANの配備」「すべての教職員がICTを活用した指導の実践・指導力の向上」など、ハード面・ソフト面の充実を図ってきた。ここ数年の日野市の取り組みは、国や文科省、各地方自治体が進めるICT活用教育のモデルとなってきた。

『新成長戦略』、『教育の情報化ビジョン』では、「・・・わが国の競争力や子どもの学力低下が進んでいる。それらの課題を解決するために、教育の情報化を進め、教育の質の向上を図り、21世紀にふさわしい学びと学校を創造するため、（ICTを）本格的に取り組んでいく必要がある」と指摘している。

昨年末、本市のこれまでのICT活用教育が評価され、総務省の絆^{きずな}プロジェクト（教育情報化事業）に指定された。対象校である平山小学校、日野第四小学校には、4年生以上の児童に一人1台のタブレットパソコンが配備され、3台のインタラクティブホワイトボードも配備された。先進的な両校の研究発表では、ICT機器を活用した個別学習、協働学習の工夫による、学力向上の取り組みが公開された。

◆平山小学校では、学力向上を目指すICT活用（算数）のテーマのもと、診断・補充教材による完全習得と発表・討議で高める数学的な思考力の育成を図る報告がされた。

◆日野第四小学校では、学ぶ楽しさの実感と自ら学ぶ意欲の向上を目指して、問題解決型学習の指導の工夫と評価について、理科と国語科を通して実践を深めていた。

このように、日野市のICT活用教育は、全国のモデルとして新たな学びを歩み始めている。

II 研究の目的

ICT活用研究委員会は、ICT活用教育の充実を目指して、ICT環境整備のあり方の検討、日野市独自の『ICTマーク』の全校取得、ICT活用実践の推進と「ICT実践事例集」の追加・作成を推進するため調査・研究を行う。

III 調査・研究の内容

1 平成23年度のICT環境の整備・充実

ICT活用教育を支える機器の更新、ソフト面の充実は、ICT活用研究委員会の中にプロジェクトチームを構成し、信州大学東原教授の指導を受けながら、各校の要望や実態、予算上の措置を考慮して、年々改善を図ってきた。特に、平成21年度のスクールニューディール政策で配備した、地デジ対応52インチ大型モニターは、平成22年度における各学校のICT活用教育の推進に大変効果的であった。

【今後の整備予定】

- ・地上デジタルテレビ・パソコン・・・市内小・中学校全ての普通教室に設置している。23年度の学級増により、不足が生じた学校に追加整備していく。
- ・教職員一人1台校務用パソコン・・・平成23年度も一人1台となるよう各学校に整備する。ICT活用教育推進室が管理し、不足が生じた学校に配布していく。
- ・授業支援用パソコンやその他の周辺機器については、これまでの活用状況を踏まえ、平成23年度の賃貸借契約の更新に向けて、今後の活用方法や整備台数等について、さらに検を進めていく。

2 日野市独自の『ICTマーク』の審査・取得（結果）

平成20年度から日野市は、全小・中学校でのICT活用教育の一層の前進、日常化を図るため日野市独自の『ICTマーク』の審査制度を創設した。

審査は、「セキュリティ部門（10項目）」「授業での活用部門（5項目）」「校務での活用部門（5項目）」の3部門で行なわれている。審査項目ごとに5段階の達成基準を決め4段階以上を合格とした。達成基準をクリアした学校には部門ごとに日野市の『ICTマーク』（認定証）が教育委員会から授与される。

(1)セキュリティ部門

情報の持ち出しが発生した場合使用台帳に記載し管理職の承認を受ける、セキュリティカードの保管などに明確なルールがある、私物パソコン・記録媒体が一切存在しないなど10項目についてICT活用推進室、外部委託業者から審査を受けた。

結果は、全校（小17校・中8校）が合格した。

(2)授業での活用部門

教員がICTを活用して教科の指導を行っている、児童・生徒がICTを活用して学習を行っている、情報安全教育の徹底など5項目について各学校が自己審査を行った。

結果は、小は12校（全17校）、中は3校（全8校）が合格した。

(3)校務での活用部門

校務支援システムの週案時数管理機能、成績管理システムの活用など5項目について各学校が自己審査を行った。

結果は、小は14校（全17校）、中は2校（全8校）が合格した。

(4)3年間の推移（小・中25校）

	平成20年度	平成21年度	平成22年度
セキュリティ部門	5 校	18 校	25 校
授業での活用部門	3 校	11 校	15 校
校務での活用部門	4 校	8 校	16 校

3 『ICT活用実践事例集』の作成

21年度、ICTを活用した優れた教育実践を集約し、日野市の財産として残すため『ICT実践事例集』を作成した。これは、ICT活用教育推進室のWebサイトに掲載され、教職員をはじめ保護者・市民にも広く公開されている。今年度は、さらに小・中学校とも新しい実践を追加し充実をはかった。4月上旬、Webサイト掲載をめざしている。（形式・内容は次ページ）

ICTを活用するねらいやポイントを わかりやすく解説する事例集

活用C型

ポイント(ICT活用の効果)

・大型モニターに児童が直接書き込める。

本時のねらい

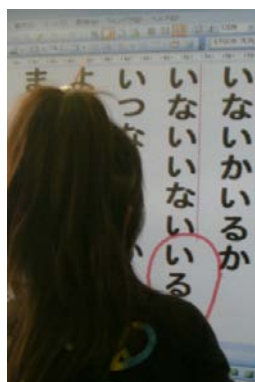
「海のイルカ」なのか疑問詞の「い」
ことができる。

解説

谷川俊太郎の詩「いるか」は、「海豚」と「居るか」という同音異義語で作られている。意味を「海」と取るか、「居るか」と取るかでアクセントの置き方などの意味も変わってくる。そこで、各グループでどちらの「い」の印を大型モニターに貼るかを決めた。また、工夫として、大型モニターに印を貼る。

(使用ソフト・機器)

授業風景



B型：ICT活用指導力Bに準じた指導実践
(教師が主にICTを活用する)

C型：ICT活用指導力Cに準じた指導実践
(児童・生徒が主にICTを活用する)

発展型：教科の内容を深めるためにICTを発展的に
活用した実践事例

活用するねらいやポイントをわかりやすく解説

- 興味をもたせ、わかりやすく説明するための活用
(資料の提示)、実物や画像、細かな部分の拡大提示)
- デジタルコンテンツ(動画)の効果的な活用
(理科ねっとわーくなど)
- 自作コンテンツの活用
- 児童・生徒の個に応じた学習を実現するための活用
(インタラクティブ・スタディなど個別学習での活用)
- 学習過程の記録や振り返り活動のための活用
(デジカメ、ビデオカメラ、スタディノートの活用)
- 児童による表現・発表・討論のための活用
(大型モニター、スタディノート、パワーポイントなど)
- 協働学習のための活用
(スタディノートによる意見交換など)

学校名 実践者名

教科名 国語 第2学年 単元名「 いるか 」

活用C型

ネーミング

- ・ともだちはどっち？

ポイント(ICT活用の効果)

- ・大型モニターに児童が直接書き込みをして、発表することによって互いに意見交換ができる。

本時のねらい

「海のイルカ」なのか疑問詞の「いるか」なのかを考え、速さや声の調子を工夫しながら読むことができる。

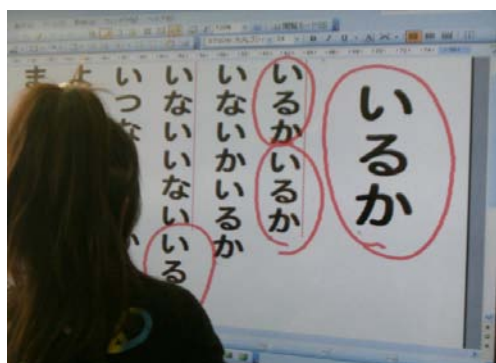
解説

谷川俊太郎の詩「いるか」は、「海豚」と「居るか」という同音異義語で作られている。意味を「海豚」と取るか、「居るか」と取るかでアクセントの置き方などの意味も変わってくる。そこで、各自でどちらの意味にした方がより良いかを考えさせ、教科書に印を付けさせた。その印を大型モニターに映し出すことで友達同士で意見交換をすることができた。

また、工夫した読み方で音読後、どちらの意味としたのかを答え合わせする時にも、大型モニターに印を付け発表した。

(使用ソフト・機器 大型モニター)

授業風景



(実践者：潤徳小学校教諭 牛島由美子)

2 教科等研究係

理 科 教 育 推 進 研 究

I 研究テーマ

「魅力ある理科授業の展開とひのっ子の基礎学力の向上」
～理科支援センターを拠点とした教員研修を目指して～

II 研究の主旨

1 日野市学校教育基本構想

平成21年2月に策定された、日野市学校教育基本構想の「V 教育目標を達成するための11の項目」第1項目「確かな学力の向上【ひのっ子学力向上プログラム】」の中で

「主要施策」

(6) 自然や科学技術・ものづくりへの関心を高めるために、教員の実践的研究・研修や必要な設備を整えて、理科教育の充実を図ります。・・・(省略)

と、述べている。

本委員会には、上記の主要施策に基づき、理科の実践研究や研修を通して教員の理科授業の充実を図り、理科教育を支援する施設・設備を整えることを通して、日野市の理科教育の充実を図ることを求められている。そこで、理科教育を推進するために、教員研修の検討や理科授業をサポートのための方策、外部との連携などについて研究を進めることとした。

2 これまでの経過

日野市学校基本構想に基づき、平成20年度に本研究が始まり、3年目になる。

平成20・21年度は、「ひの子教育21開発委員会」の「観察・実験融合型デジタル教材(理科ねっとわーく)の活用」研究と連携をして、同じ研究テーマのもと、研究を進めてきた。

本年度は、これまでの「ひのっ子教育21開発委員会」の2年間の研究成果も継承しつつ、理科教育推進のための研究を進める。

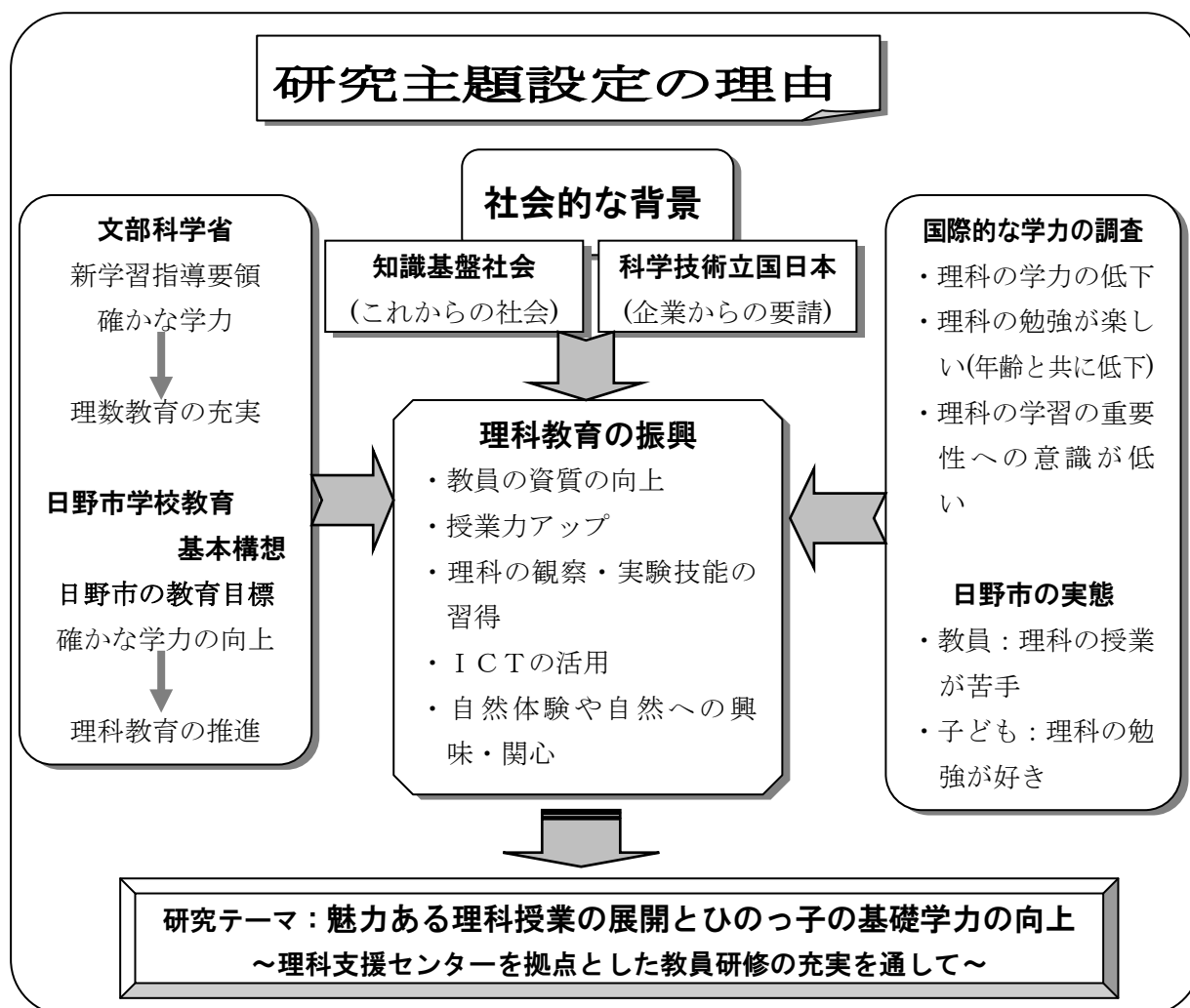
III 研究主題設定の理由

新学習指導要領の理科、第1章「総説」の「1、改訂の経緯」で、これからの世界・21世紀を新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる面で飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」としている。こうした知識基盤社会では、理科教育における「生きる力」として、

- ・自ら課題を見出し、進んで解決する力としての問題解決の能力の育成
- ・様々な現象を結び付け、新しいものを見出す力としての、考える力の育成
- ・異なる文化や文明との共存や国際協力の中で、知を共有し、協力して新しいものを創り上げる力の育成が求められている。

一方、科学技術立国日本として、日本の社会を支えてきた企業からは、

- ・自然に親しみ、体験や経験が豊かな子どもの育成
 - ・科学技術に興味や関心を抱く子どもの育成
 - ・物を作ること、新しいことに挑戦しようとする子どもの育成
- といった、「創造力あふれる子どもの育成」が求められている。



また、新しい学習指導要領において、確かな学力を育むための教育内容の主な改善事項の(2)に、理数教育の充実が挙げられている。そして、指導内容が増え授業時数も増加した。日野市においても、研究の主旨で述べたように、確かな学力の育成の一環として、理科教育の推進に力を入れている。

OECDによる「生徒の学習到達度調査」(PISA)や国際教育到達度評価学会の「国際数学・理科教育動向調査」(TIMSS)の国際調査で、日本は理科の学力の順位の低下がみられる。一方、TIMSSが学力に関する調査と共に行った「理科の勉強に対する意識調査」では、「理科の勉強が楽しい」との回答は、日本の小学4年生で80%以上であるにもかかわらず、中学2年生では、国際平均を大きく下回る50%台であった。また、「理科学習が重要」と回答した生徒は、中学2年生で50%以下であった。理科の学力や理科に対する意識などの面からも、一層の理科の授業の充実が叫ばれている。そして、科学技術振興機構(JST)では、コア・サイエンス・ティーチャー(CST)事業や理科支援員等配置事業を実施している。

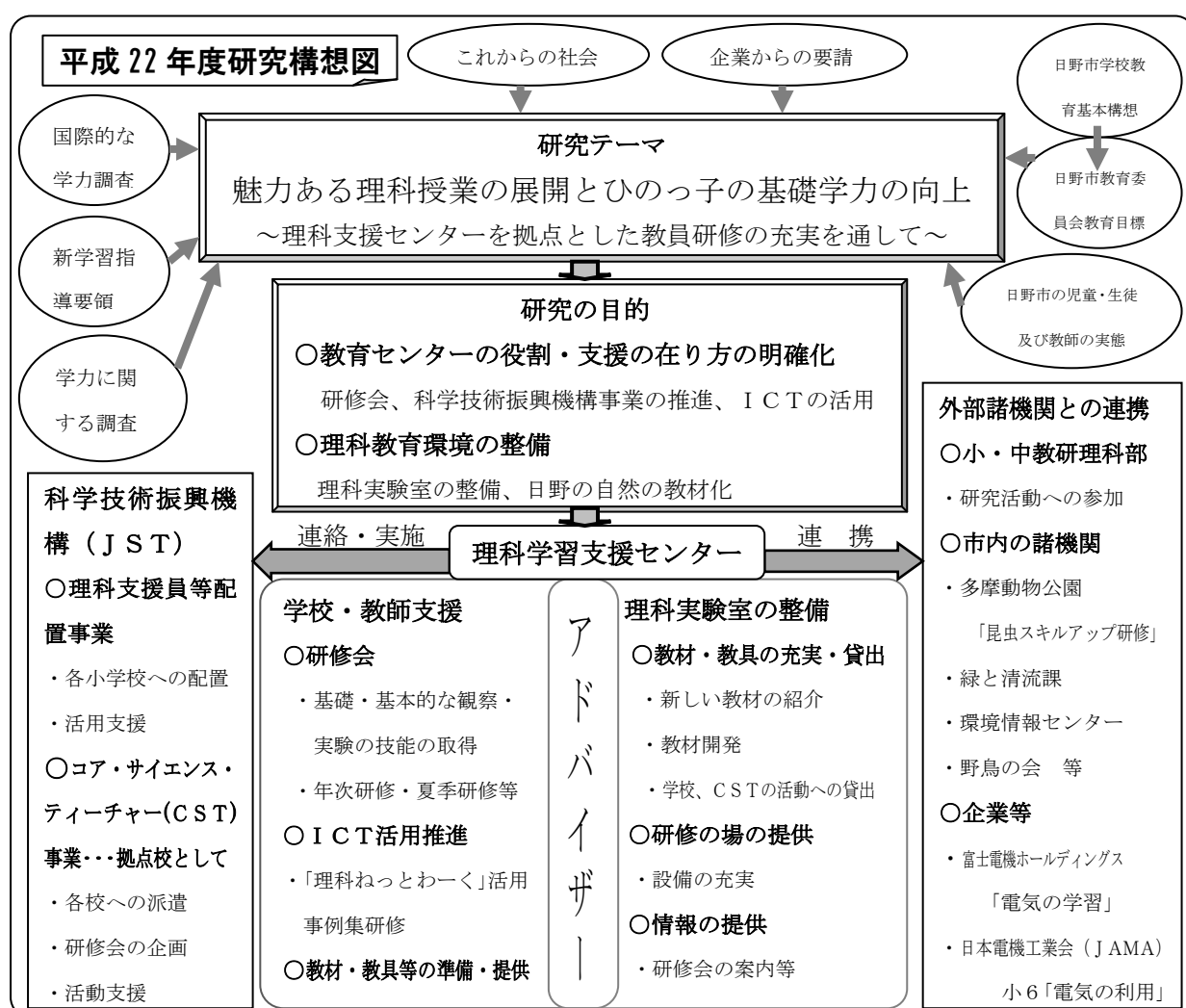
日野市では、平成20年度に教員と児童を対象とした調査を行った。「理科の授業が好き」と回答した子どもは、小・中学校とも80%前後であった。一方、小学校教員で理科を苦手と回答した教員が65%を超えていた。この値は、全国平均の約60%よりも大きい。

こうした状況の中で、理科教育の振興には、理科に対する教員の資質の向上を通して、理科の授業力をアップさせる必要がある。そのためには、理科の観察や実験についての技能の習得や「理科ねっとわーく」などのデジタル教材の活用能力を高める必要がある。自然体験や自然への興味や関心を高め、自然の事象を多面的に見、生活と結びつけて考える力を教員に培うことであるとする。

こうした教員の資質向上を図ることで、教師は子どもにとって魅力ある理科授業を展開し、子どもに科学的に考える力を育み、ひのっ子の基礎学力の向上につながると考え、本研究テーマを設定した。

IV 研究の構想

本年度の研究の目的及び理科支援センターを中心とした研究内容を研究構想図にまとめた。



V 実践

1 理科実技研修会

夏季休業中の研修の一環として、8月2・3日(月・火)の2日間、日野第五小学校の理科室及びP C室を使って実施した。理科の基礎・基本講座は両日の午後に、富士電機(株)による電気にかかわる実技研修は両日の午前中に実施した。

(1)理科の基礎・基本講座 市内の理科に堪能な先生方が講師を勤めた。講師の先生方は、1学期から夏季休業中にかけて何度も集まり、研修会の準備をした。

①理科授業基礎講座：講師・大成鐸夫先生(日野八小)

- ・理科の授業を中心に、メビウスの輪や紙の竹とんぼなど、簡単な教材で子どもが興味を持って取り組む授業の紹介をした。
- ・振り子の実験や比重の違う液体を使った浮力の実験などを通して、教材の工夫や実験に当たっての教師が注意すべき事項を指導した。



理科授業基礎講座

②学年別講座：講師・C S T 栗木勇先生(日野四小)、増田由香里先生(旭が丘小)

新学習指導要領の新しい教材や実験器具の基本的な操作の実習を中心に行った。

- ・3年生(1日目)：「風やゴムのはたらき」、自作天秤の作成
- ・4年生(2日目)：マッチの扱い方、アルコールランプやガスバーナーの使い方
- ・5年生(1日目)：電流計の使い方(つなぎ方や測定方法)、電磁石
- ・6年生(2日目)：気体検知管の使い方、水溶液の作り方

③デジタル教材「理科ねっとわーく」活用講座

：講師・C S T 栗木勇先生(日野四小)、増田由香里先生(旭が丘小)

- ・昨年度作製した、「理科ねっとわーく活用事例集」の紹介
- ・「理科ねっとわーく」のデジタルコンテンツに触れる。

※ 参加者の感想から

- ・子どもの興味を引くような実験で楽しかった。早速学校で行いたい内容でした。
- ・実験を実際に行うことで、どの順番で指導をしたらよいかよくわかった。
- ・「風・ゴムのはたらき」の車、手作りの天秤など、大変参考になった。
- ・マッチを使うことなどが苦手な先生もいるのだなあとと思った。
- ・「理科ねっとわーく」で今回初めて知ったものもあり、これからも積極的に活用したい。

(2)電気にかかわる実技研修：講師・富士電機株式会社の技術部門の専門スタッフ等

- ・モータ駆動原理と鉄道への応用
- ・コイルとフェライト磁石でモータを作り、動かす。
- ・手回し発電器作りと電気を貯め、電気を使う。



学年別講座・4年



学年別講座・5年



富士電機・モータ作り

※ 参加者の感想から

- ・今日作ったモータも、新幹線のモータも、理論は同じということで驚いた。ものづくりの大変さや面白さを感じることができた。
- ・とても学ぶことの多い研修会だった。授業の構成や準備についても参考になった。

※ アンケート：「授業に役立つ内容でしたか」に対する回答(人数)

日にち	回答項目	基礎講座	学 年 別	学 年 別	理科ねっとわーく	富 士 電 機
			2日・3年、3日・4年	2日・5年、3日・6年		
八月二日	おおいにあてはまる	13	5	8	9	9
	あてはまる	5	2	4	9	5
	どちらともいえない	0	0	0	0	3
八月三日	おおいにあてはまる	13	9	6	5	8
	あてはまる	3	0	2	10	5
	どちらともいえない	1	0	0	2	2

2 企業による研修



研修の教材をカメラに収めて

移行措置で本年度から実施される小学校6年生「電気の利用」の単位について、日本電機工業会(JEMA)による研修会を、教育センター・理科実験室で実施した。

「電気の利用」の単位は、新学習指導要領で新設された単位である。コンデンサーや手回し発電機、発光ダイオード(LED)電球など新しい教材と、電熱線の発熱などしばらく小学校の学習で扱わなかった内容が中心である。多くの教員にとって初めての教材である。

そこで、日本電機工業会の研修プログラムに沿って研修を行った。教材の特性に関するデータをもとにした講義の後、実際に教材を操作して授業と同じ実験を体験した。

※ 参加者の感想より

- ・今日の研修に参加し、とても勉強になった。理科の授業は教材や指導書を読むだけではわからないことも多く、いつも不安になるが、こうやって実践をする機会を設けて頂いて、大切なことが分かり、ちょっと自信が持てそうだ。他の単位でも学びたい。

3 昆虫スキルアップ研修

多摩動物公園を会場にして2回実施

(1)4月22日(木)：多摩動物公園主催

昆虫に触れたことがない教員や昆虫が苦手な教員を対象とした研修

- ・昆虫館での昆虫の生態観察、チョウの観察や飼育法

(2)8月19日(木)：日野市教育委員会主催

午前：チョウの行動観察や飼育方法

午後：野外での虫の捕獲実習と昆虫の分類、コオロギの観察と飼育方法

※ 参加者の感想より

- ・一日研修を受けて虫に対する抵抗も減り、逆に興味が湧いてきた。自分が虫好きになり、子どもに伝えていきたいと思う。
- ・チョウの様子や飼い方の説明など、よくわかった。準備が大変だったと思う。来年もぜひ

虫取り



チョウのたまごの観察

ひ開催してほしい。若い先生方にも参加を勧めたい。

4 理科支援センターとしての理科実験室の整備

物品置き場であった旧高幡台小学校の理科室を、理科実験室として使えるように整備を進めた。理科実験室の整備状況は、窓側の流しに水道を設置した。電気は、壁コンセントのみ使用できる。ガスは使用できない。と、いった状況である。現在の教材・教具は次のようである。

- ・CST活用用の教材・教具・・・新しい教材・教具を中心に整備中
- ・研修会用の実験機材等・・・理科室に置かれていたもの、小学校から入手
- ・郷土資料館より借用・・・純水器、遠心機、孵卵器(恒温器)、天体望遠鏡

※ 生物教材を提供するための準備・・・モンシロチョウ、スジグロシロチョウの幼虫の食草である西洋ワサビの栽培等の栽培、来年度チョウの卵を提供予定

5 理科支援員等配置事業

本年度は小学校17校中13校で理科支援員を活用した。配置された理科支援員の人材源は、右の表に示

区分（人材源内訳）	理科支援員
学生（大学生、大学院生、専門学校生等）	2人
退職教員（退職校長、退職教頭、退職教員等）	4人
地域人材（大学生、退職教員、講師経験者、研究者、企業関係者以外）	13人
合 計	19人

す。教員免許の保有状況で分けると、教員免許保有者9校で7名（1人で2校の支援員をされている方2名を含む）、教員免許が無い方4校で12名である。支援員としての経験年数は、3年が6名、2年が10名、1年が3名で、複数年理科支援員をされている方が多い。

活用方法については、各学校の実情、支援員の経験などにより異なっていた。また、通常は学習支援員をし、支援が必要な理科の学習の時は、理科支援員として活動する例も見られた。今年度は理科支援員の配当時間が大幅に減ったことへの対応でもある。

(1) 大学生が支援員の事例

学年会で授業内容を打ち合わせ、理科担当の教員が準備する物をメモにして渡す。支援員は、メモをもとに必要な物品を準備する。

授業中は授業支援とともに、教材の出し入れや不足したものとの補充を行う。

授業後は片付けとともに、管理職等の指示により理科室や理科準備室の整理をする。

※ 他学校での工夫

- ・授業の略案を提示し、それに基づいて準備をする。
- ・理科支援員が授業中児童に支援できるよう予備の物品を置くコーナーを設置する。



授業で使う薬品の準備

(2) 退職教員が支援員の事例

事前に学年会等で打ち合わせを行い、単元の指導計画について話し合いを行う。必要に応じて、指導法や教材研究、器具の使い方についての研修会を実施する。

授業前に打ち合わせにもとづき、教材・教具の準備を支援員が行う。授業中は授業支援を行うが、必要に応じて実験器具の操作方法を児童に説明したり、指導している教員へのアドバイスをしたりする。

授業後は、担任と今日の授業や次時の授業について、簡単な打ち合わせをする。

※ 理科支援員が中心になって授業を進め、担任は授業を支援する学校も見られた。

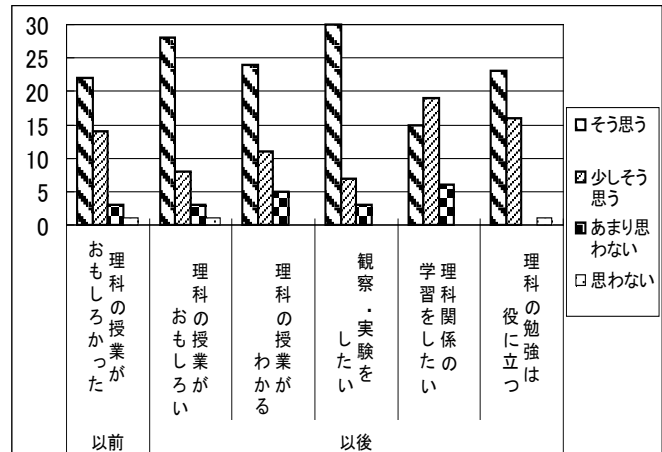


(3)理科支援員配置に関するアンケートより

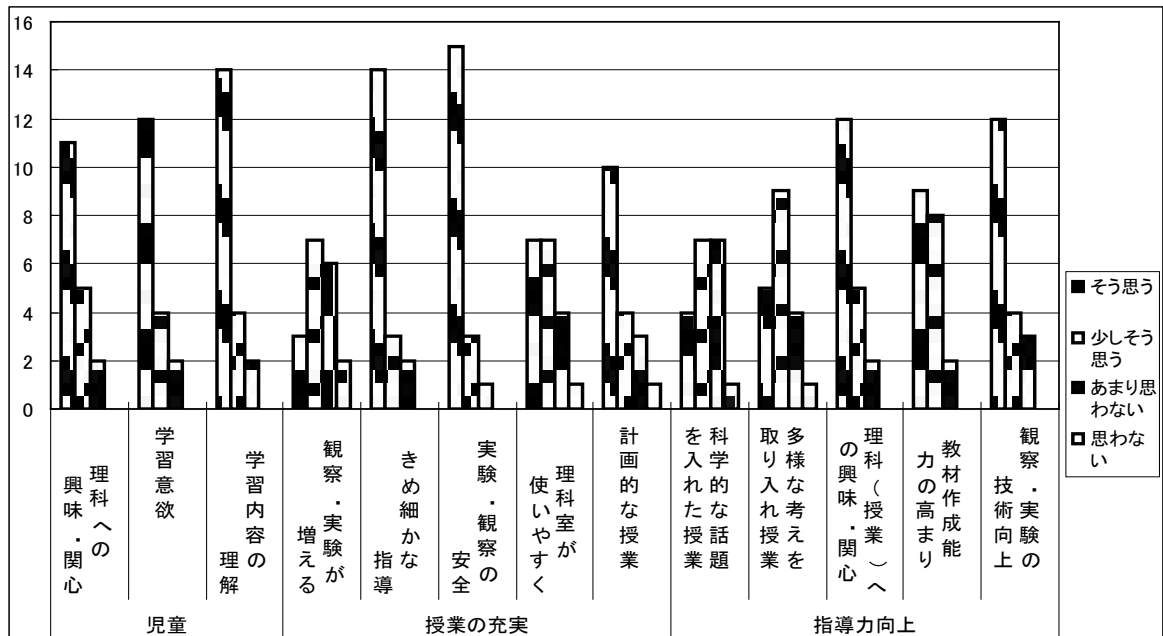
①理科支援員配置前後の児童の変化(平山小・5年生)

科学技術振興機構(JST)が
 抽出校とした平山小学校で、
 5年生に行った調査結果

配置後の理科の授業に対し
 て、肯定的な回答が多い。
 理科支援員が配置されたこと
 で、多くの子どもが理科の授
 業に前向きにかかわり、学習
 が理解できていると感じる
 など、支援員配置の効果が窺
 える。



②理科支援員配置による児童・授業・教師の変化(教員への調査)



理科支援員に授業支援を受けた先生からのアンケート結果である。「実験・観察が増える」「理科室が使いやすくなった」の項目で「そう思う」という回答が少ないのは、理科支援員の配置が2・3年目になり、多くの学校ではすでに行われているためと考えられる。「観察・実験が増える」と答えた教員の、増加時数の回答で一番多かった項目が、4～6時間増えたとの選択項目であった。「意見・要望等」の記述欄には、

- ・たくさんのアドバイスをいただき、理科に対する知識がついた。
- ・児童には実験の仕方や用具の取り扱い方が身に付き、教員には実験方法や授業の進め方をご助言いただき、実験技術が高まった。
- ・2人1組の実験スタイルによって、子どもたちがいきいきと実験するようになった。
- ・薬品を準備する授業で、準備・片付け、授業支援がありがたかった。

多く寄せられた意見は、次の2点であった。

- ・理科支援員の配置時数を増やしてほしい。
- ・来年度も配置事業を継続し、自校への配置を希望する。

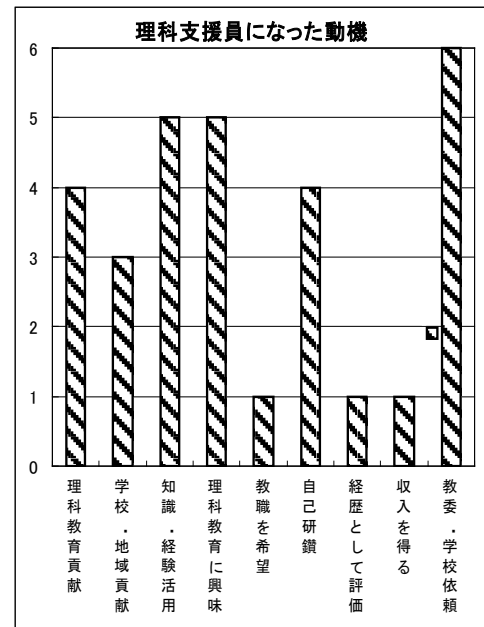
③理科支援員になった動機

多くの支援員の方が理科に対する情熱や学校・教育への貢献という積極的な動機から支援員を引き受けてくださっていること、自己研鑽という前向きな姿勢を持たれていることは、大変ありがたいことである。

※「意見・要望等」より

- ・日野市内の同じ仕事をしている方との意見・情報交換ができる機会があったらよいと思う。登録制度があれば広く人材を確保できるのではないかと思う。

- ・若い先生方と主に、後ろに下がった立場で理科学習に参加させていただけることに喜びを日々感じている。



6 コア・サイエンス・ティーチャー（CST）事業

総合科学技術会議の「革新的技術戦略」（H22.5.1）において、理数教育指導における中核的役割を果たす教員を

==本年度のCSTの活動==

- ・夏の研修会：学年別の新単元を中心とした実技研修
「理科ねっとわーく」活用事例集の紹介
- ・校内研修：実験器具の扱い方、アルコールランプの使い方
- ・学年での研修：アルコールランプの児童への指導、電磁石の指導
- ・小教研理科部：実験器具の基本的な使い方、水溶液の実験



気化したアルコールに着火

養成し、教員の指導力の向上を目的として、平成21年度よりはじめられた。日野市では、日野第四小学校・栗木勇主任教諭と旭が丘小学校・増田由香里教諭の二人がCSTとしての認定を受けた。

◎ 学年での研修：4年「アルコールランプの児童への指導」（平山小にて）

4年生で、児童は初めてアルコールランプの使い方を学ぶ。この学習では、マッチの使い方とアルコールランプの使い方の二つの要素が学習に含まれる。

研修では、4年生の先生方は両方の使用方法を実習するとともに、アルコールの危険性を体

感した。後日、担任が授業で指導をする際に、授業支援者として参加した。

7 小・中学校教育研究会理科部との連携

小教研・中教研理科部との連携を進めることが理科教育の推進に必要と考え、部会に出席し、

小教研
研究授業



中教研・デジタル教材の紹介

活動の状況を把握した。小教研理科部は、学年ごとの分科会での授業に向けての教材研究や指導案検討を行っていた。また、C S Tによる実技研修も部会の中で行われた。二学期からは授業研究を中心に研究が行われた。

中教研理科部では、I C Tを活用した授業を取り上げていた。日頃授業で使っているデジタル教材の紹介や、今年度導入された大型T Vを活用した授業の紹介が行われた。また、二学期にはI C Tの活用を学習に取り入れた授業研究が行われた。

8 日野の生き物の教材化（3年生用）

日野市は、多摩川と浅川に囲まれ、谷地川にも接する地域にあり、市内を用水が流れる水に恵まれた地域である。そして、南には多摩丘陵が連なり、市内各地に雑木林が点在している。川辺堀之内や倉沢を中心に里山の風景も色濃く残されている。そうした恵まれた環境に息づく日野の自然を映像に収めている、多摩平にお住まいの井上録郎氏に協力をお願いし、3年生の生き物の学習に活用できるビデオを作成することにした。

小学3年生「日野の生き物」の映像一覧表 井上録郎氏、撮影・編集

生きもの名称	撮影場所	生きもの名称	撮影場所	生きもの名称	撮影場所	生きもの名称	撮影場所	生きもの名称	撮影場所
オープニング(写真)		春 イラスト		夏 イラスト		秋 イラスト		冬 イラスト	
日野市内遠望	見晴公園	里山	川辺堀之内	駒形の渡し船	浅川	紅葉とこども	川辺堀之内堀	雪の市内遠景	見晴公園
魚捕り	谷地川	農家	倉沢	ヒゲナガカワトビゲラの幼虫	浅川	コオロギ	自宅	ハクビシンの足跡	タヌキ・ウサギ村
10年前	浅川	ウグイス	川辺堀之内堀	ヒラタカゲロウの幼虫	浅川	オオカマキリ	⑧空間 池	鶴とシラサギ	多摩川
ふな		カタクリ	東光寺台緑地	ハグロトンボ幼虫	谷地川	アキアカネ ランゲプー	川辺堀之内堀	オナガ・竹藪	川辺堀之内堀
ウグイス		サクラ	東光寺台	ハグロトンボの産卵	谷地川	アマダロヒョウモン交尾	川辺堀の内田んぼ	カメムシ、ドンダリの芽	野鳥公園
カケス		キジ	浅川	メダカ	多摩川	オンブバッタ	川辺堀の内田んぼ	ムクドリの群れ	⑧空間
ザリガニ		レンゲソウ	川辺堀之内堀	オイカワの産卵1	谷地川	アマガエル	川辺堀の内田んぼ	タヌキ、ネズミの食痕、足跡	谷地川上深場
ナマズ		タンポポ	ゴルフ場脇	オイカワの雄の争い	谷地川	シマヘビ	タヌキ・ウサギ村	ネズミの足跡	多摩川
ウナギ		コイの産卵	谷地川	アブラハヤ	浅川	タヌキの足跡	谷地川	ノスリ	多摩川
アオスジアゲハ		ムクドリ	多摩川土手	アユ	浅川	タヌキ	⑧空間	オオタカ	多摩川
キチョウ		シジュウガラ	多摩平	ウシガエルのオタマジャクシ	谷地川	メジロ・柿	実践女子大前	イタチの足跡	多摩川
ウスバカゲロウ		ヒバリ	東光寺台地	イシガメ	多摩川	コジュケイ	川辺堀之内堀	イタチ	谷地川
オンブバッタ		野ウサギ糞	タヌキ・ウサギ村	スッポン	浅川	カワセミ	浅川		
カナヘビ		野ウサギ(写真)	タヌキ・ウサギ村	モンシロチョウ	浅川	アオサギ	自宅		
カブトムシ		ホタル		アゲハチョウの幼虫	自宅				
アキアカネ				アゲハチョウ	川辺堀之内堀				
アマガエル				クロアゲハ	駅上公園				
コサギ				デントウ虫	浅川土手				
トビ				カブトムシ	梵天山古道				
ノスリ				アブラゼミ	中央公園				
タヌキ				アシナガバチ・肉団子	野鳥公園				
				オオスズメバチ	谷地川				
				カナヘビ	野鳥公園				

この映像は、次のような観点でビデオに作製・編集をした。

- ・児童が日野の自然・動植物に興味・関心を持つよう、日野の動植物をたくさん取り上げる。
- ・水に恵まれた日野の自然を生かして、教科書であまり取り上げていない、川や水辺の生き物を多く入れる。

- ・映像は撮影した時期を中心に季節ごとにまとめることを基本にする。
映像等については、次のような工夫をすることにより考えている。
- ・ナレーションと共に映像にテロップを入れ、文字からも情報を発信する。また、教師用に解説書などの資料も作成する。
- ・全ての映像を季節順に30分程度で全てみられるものと、「春、夏、秋・冬編」に3分割し、それぞれの季節を10分程度に分割した映像も作成する。
- ・映像はDVDにし、完成後は市内の全小・中学校に配布する。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

理科教育推進研究委員会を中心に、1年間研究を進める中で、次のような成果が得られた。

- 日々の授業に役立つと、受講者が感じる実技研修会を行うことができた。
- 教育センターの理科室の整備が進み、理科支援センターとしての役割を果たすべく、理科実験室として活用できるようになった。今年度、1回ではあるが研修会も実施できた。
- 理科支援員等配置事業にもとづき理科支援員を希望する学校に配置したことにより、配置校での理科授業の充実がみられた。
- CSTを活用して、夏季研修会の学年別研修や「理科ねっとわーく」の活用事例集の紹介、希望する学校や小教研で研修会を行うことができた。
- 小学3年生「日野の生き物」のビデオを作成し、4月から活用できるよう、完成に向けての道筋ができた。

2 今後の課題

今後の理科教育を推進するための研究として、残された主な課題は次にあげる。

- 本年度の研究は理科を苦手とする教員が多い小学校を中心としたが、今後中学校の理科との連携や支援をどのように行うか。
- 理科支援センターとして、教員の理科の授業力向上のためにどのような事業が行えるか具体的に検討を行う。
- 研修会の充実に努めるとともに、研修会への参加者を増やすための条件整備について。
- 来年度は、新学習指導要領の小学校での実施、中学校での移行時期である。新しい単元や教材を実施への支援をどのように進めるか。
- 理科支援員等配置事業とCST事業のさらなる充実を進める。
- 小3「日野の生き物」の活用し、小4「季節と日野の生き物」のビデオの作成を行う。

理科教育推進研究委員会

委員長	太田 由紀夫	日野第四小学校長
副委員長	千葉 正	日野第四中学校長
委員	馬場 武	学識経験者
委員	大澤 真人	CST 専属理科支援員
委員	土産田千寿子	平山小学校副校長
委員	中嶋 建二郎	日野第二中学校副校長
委員	栗木 勇	CST、理科研究校研究主任 日野第四小学校主任教諭
委員	増田 由香里	CST、旭が丘小学校教諭
委員	関井 研司	理科研究校研究主任 日野第七小学校主任教諭
指導主事	小林 邦子	日野市教育委員会学校課
運営担当	島崎 忠志	日野市立教育センター

3 ふるさと教育係

郷土教育推進研究

I 研究主題

郷土意識を育む指導の在り方
～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～

II 研究の趣旨

本研究は、日野市の小・中学校、博物館、図書館、教育委員会、教育センターが連携して推進する6年目の継続研究である。教育基本法、学校教育法、学習指導要領が改正され、教育の目標に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」の文言が加えられた。本市の「教育基本構想」には、この考え方のもと、第2項に「日野市の自然・歴史・文化・産業等、郷土をより親しく学ぶために、郷土資料を編集し、地域の方々や専門家の協力を得た授業の推進」、第7項に「授業の質の向上を図るために、地域の教育資源を活用した授業の実施」が明記されている。郷土教育が、日野市の教育の最重要課題の一つとなっている。即ち、学校教育では、「郷土に誇りと愛着をもったひのっ子」「将来の日野を背負って立つ日野人」の育成が、市民から期待されている。そこで、本委員会では、日野の豊かな自然や歴史的環境を活用した郷土教育を実践し、児童・生徒に日野のよさに気付かせ、郷土を大切にすることの大切であると考えた。そのため、郷土教育推進研究委員会では、郷土の教材化に努め、指導計画を作成し、授業を実践している。そして、この実践と成果を全市の小・中学校に普及・啓発するため、「郷土日野」指導事例集を作成し、市内全小・中学校、関係機関へ配布している。

この趣旨を生かすため、今年度の研究主題を「郷土意識を育む指導の在り方～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～」と設定し、重点課題を3点に絞って推進研究と授業実践に当たった。

III 研究の目的

「ふるさと日野に誇りと愛着をもったひのっ子」「将来の日野を背負って立つ日野人」を育成するために、学校における郷土教育の在り方を研究する。この研究に基づき、各学校は郷土を活用した様々な教育活動を実践し、次のような児童・生徒を育成することが重要な課題となる。

- 郷土の歴史、自然、文化、産業、人を理解し、感謝の心をもった ひのっ子
- 郷土の特色やよさに気付き、継承・発展させたいと願い、行動する ひのっ子
- 郷土の一員としての自覚と誇りをもち、仲間や郷土の人々と協働できる ひのっ子
- 郷土の未来を思い描き、よりよい郷土の実現を目指して実践できる ひのっ子

IV 重点課題

今年度の重点課題を郷土教育の普及・啓発とし、具体的な課題3点を設定した。

- ① 郷土教育を推進する指導者（教員）の育成
- ② 図書館・博物館等、関係機関と連携した授業づくり
- ③ 郷土教材や実践事例の電子データ化

1 郷土教育を推進する指導者の育成

(1)夏季郷土教育研修会（市教委共催）を実施し、各小中学校のリーダーを育成する

- ・午前 百草・倉沢地区フィールドワーク
- ・午後 七生緑小学校で実践事例の発表・講義・演習

(2)郷土教育推進研究委員が各学校、地域で郷土教育のリーダーとなる

- ・毎月の委員会で、実践報告・協議を重ね、研究を深める
- ・学識経験者、博物館学芸員、図書館司書から情報・資料の提供と指導・助言を受け、郷土教育の実践に生かす。各委員が授業力を向上させた。

2 博物館・図書館・文化スポーツ課との連携

(1)郷土に関する資料や情報が蓄積されている

(2)蓄積された資料や情報をもとに小・中学校の授業を支援する。協働授業が実施できる

(3)本市の博物館・図書館は、学校・市民に開かれた機関で、専門的見地から指導・助言・協働ができる。児童・生徒が興味・関心を高め、意欲的学ぶことが出来る。

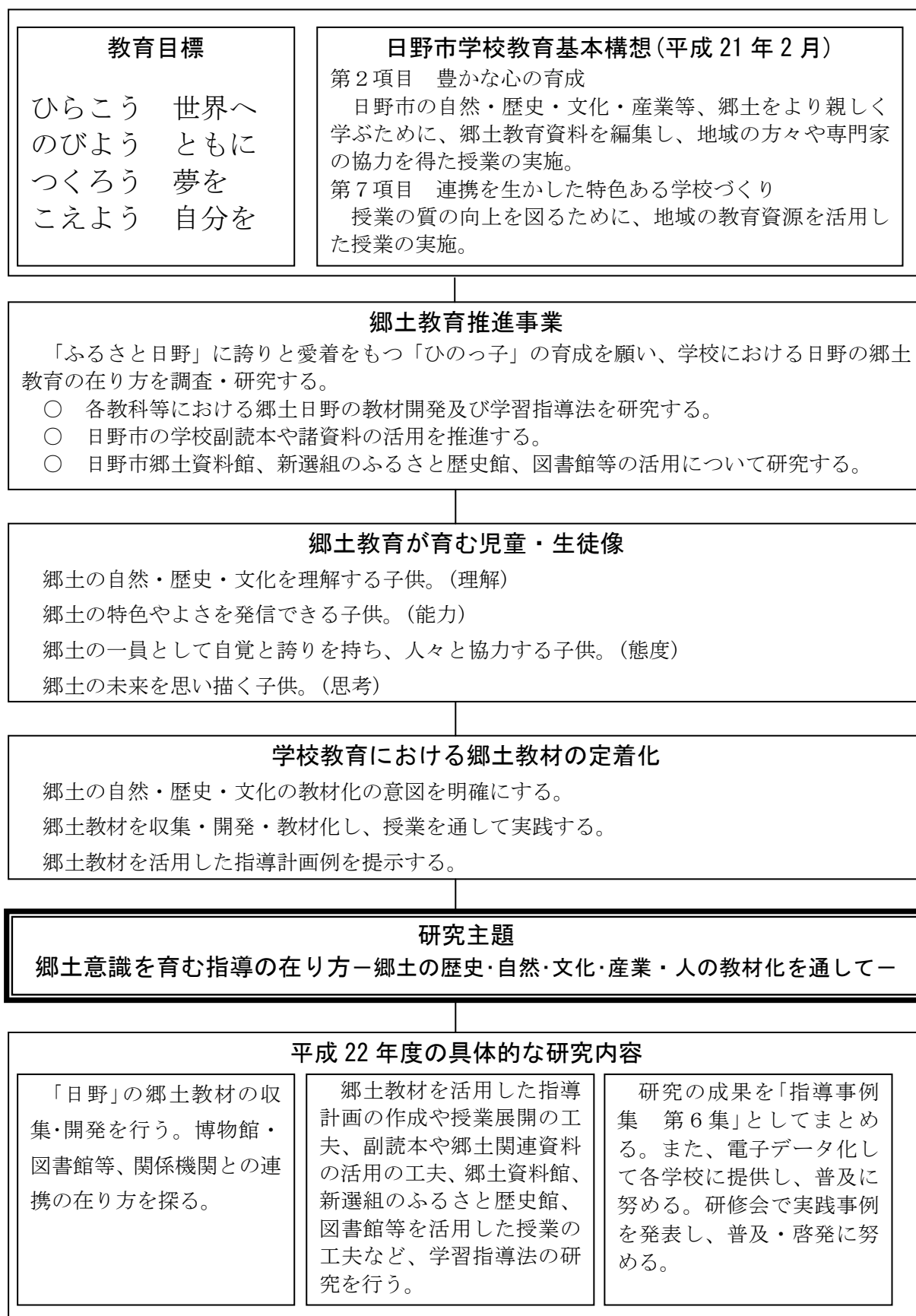
3 郷土教材の電子データ化 教育センターホームページの充実・整備（PDF化）

(1)郷土日野指導事例 第1集～第5集 全ページが閲覧できる（図版がカラーで見られる）

(2)郷土日野画像図版資料集 第5集分が完成 写真や図表が、すぐ授業で使える

V 研究の内容

1 研究構想図



2 地域を知る指導者の育成

(1) フィールドワーク（午前）

郷土教育を推進するためには、指導者自身が地域の歴史や自然、文化、人材などに触れ、知識だけではなく、実感を通して地域への愛着や誇りをもつ必要がある。その土台に立って、具体的な教材化を図り、指導を通して子どもたちの興味・関心は高まっていく。指導者自身も「このことを伝えたい」「気づかせたい」という郷土への愛着と誇りをもって指導に当たることによって、子どもたちの郷土愛は育っていくであろう。

「より深く・より広く」日野市や学区域について知り、具体的な実践が図れる指導者の育成を目指して、今年度は「百草地区」のフィールドワークを実施した。これは、日野市教委と郷土教育推進委員会の共同事業として、本委員会のメンバーが講師となって実施したものである。フィールドワークを通して地域素材をどのように教材化するか、どのように提示し実践するかを考えた。



地域の概要

百草村や三沢村、落川村は丘陵の下方が畑で、程久保川や多摩川沿いの低地が田であった。水田耕作と養蚕によって現金収入を得て、丘陵の雑木林から燃料の薪を取ったり、炭を焼いたり、落ち葉で堆肥を作るなど生活に必要なものを入手していた。しかし、現在では開発が進み、浮島のように百草園周辺に緑を残すだけになってしまった。



百草図書館

当日は、百草図書館の廊下に、“ひの「いま」「むかし」”と題して、市民から募集した百草・倉沢地区の写真が多数展示してあり、フィールドワークの導入として活用させて頂いた。写真は視覚に訴えわかりやすいので、昔の暮らしを子どもたちに伝えるのに大変適した教材になる。



東光寺跡

百草園の下には、東光寺というお寺があったが、土砂崩れで移転した。この寺の山号は砂土山といったが、多摩丘陵はもともと海の底で、少し掘ると平山砂層という砂の層が出てくる。この地形の特色を生かして、山号が名づけられた。現在のお堂にある地蔵は「安産地蔵」として地元では親しまれている。また、道しるべを兼ねた馬頭観音文字塔が残っている。



百草園

百草園には松連寺という寺があったが、廃仏毀釈で廃寺になり、明治18年百草出身で横浜の生糸商人だった青木角蔵(副読本『わたしたちの日野』に掲載)が買い取った。その後、昭和32年に京王電鉄に転売され、今に至っている。はっきりしないが、ここには鎌倉幕府と関係の深い真慈悲寺があったようである。



発掘現場と真慈悲寺調査センター

真慈悲寺と松連寺の関係は明らかではない。幻といわれた真慈悲寺の謎に迫ろうと市民ボランティアも参加して、発掘調査などが実施されている。トロイ遺跡を掘り当てた「シュリーマンの日野版」とも言えそうだが、当日は発掘現場を見たり、調査の拠点になっているセンターで出土した瓦を見たり、今までの研究成果の説明を受けた。



百草八幡神社

ここは、源氏と関係の深い神社と言われ、国指定重要文化財の阿弥陀如来像が安置されている。その背中には「真慈悲寺」と刻まれていることから、この寺との関係が推測されている。周辺には市の指定天然記念物になっているスダジイの群生があり、古いものは樹齢300～400年と推定されている。



百草観音堂と万蔵院台の庚申塔

百草観音堂は、武相48観音の第9番札所、堂内には日野市指定有形文化財の聖観音菩薩像(木造)などが納められている。この地を治めた旗本の小林権太夫の建てたもので、民間で行われていた庚申塔も古墳の近くに建てている。これは、昨年市の文化財に



指定され、下の方は「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿が彫られている。庚申塔などの石造物はこの近辺でよく見られ、当時の人々がどのような願いを持っていたのかを知る、よい教材になる。



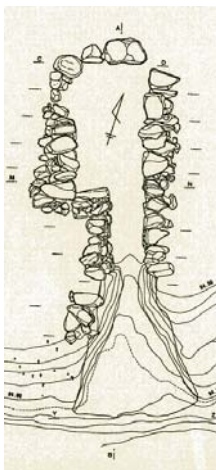
由木農園

昔、万蔵院という山伏の修験場があり、医療活動も行っていた。現在は、日野市の学校給食に使われている卵やジャムの原料となるりんごなどを栽培している。養鶏の特徴は、遺伝子組み換えをしていない餌や着色剤の入らない餌を使っていることで、尿の臭い消しとして下にコーヒー豆を置き、最終的には肥料として使うなど環境に配慮している。



雑木林と市民ボランティア

倉沢の斜面には、多摩丘陵の緑の名残りともいえる約4haの貴重な雑木林が残っている。所有者となった日野市とパートナーシップ協定を結んだ市民ボランティアが中心になって下草刈りや落ち葉掃きなどの手入れを行い、また市民農園を運営するとともに人と自然の共生を目指して里山の保全に努力している。



古墳

万蔵院台地の縁には、6世紀から7世紀前半にかけての古墳が3基あり、現在は2基の石積みが残っている。また、古墳からは、金環や鉄族、直刀、須恵器高杯などが出土している。この古墳は大栗川の対岸、多摩市の稲荷塚古墳などに関係があると言われ、南の斜面には多数の横穴墓が発見されている。



七生緑小学区の石造物

つぐみは地元ではチョウマンと呼ばれ、かつては蛋白源として霞み網で捕まえて食べていた。百草園の前には、これを供養して昭和28年建立の「野鳥供養碑」がある。また、新堂谷戸の上の台には安永6(1777)年の六地藏と万延2(1861)年の道祖神が祀られている。六地藏は色が刻字された珍しいもので、庚申塔も並んでいる。さらに、百草八幡神社には、松連寺の歴史について記した「松連禅寺之碑」や当時の文化人によって作られた「松連寺詩碑」、きつねに乗った「秋葉権現像」などがある。

由木農場聞き取り

玉泉院(後に万蔵院)慶祐が百草に定住したのは天正年間(1573～92)で、以前は母屋の西に土塁があり、その辺に山伏の修験場の万蔵院(聖護院系の本山派)があったようだ。2, 3年前から、卵は給食用として日野市内の小・中学校 25 校(全校)へ納めている。

養鶏は、約 50 年前に養豚から切り替えた。りんごは、八王子の恩方に見学に行き、日野でも可能とわかり、市の補助で始めた。

(2)研修会 (午後)



午後の研修は、七生緑小学校のパソコン室において、フィールドワークをした百草・倉沢地区の理解をさらに深めるとともに、授業での活用の方法について学ぶ以下の講義・演習を実施した。

- フィールドワークの復習と補足
- 蚕糸試験場跡を活用したカイコの飼育体験
- 出前いっちょを活用した縄文時代の学習
- 日野の昔話を活用した授業展開



郷土教育推進研究委員会の課題の一つに、図書館・博物館との連携がある。そこで、中央図書館司書から図書館の活用方法について紹介した。博物館・図書館を有効に活用することにより、迅速に資料が収集でき、教材研究の時間を短縮することができる。加えて、博物館・図書館と一緒に授業を作ることができると付け加えた。

続いて、文化スポーツ課係長から児童・生徒が調べ学習をする際、漠然と「新選組について知りたい。」と尋ねるのではなく、「新選組が日野宿本陣をどのように使っていたかを知りたい。」と具体的に質問すると資料を用意することができるという話をした。また、中央本線と日野煉瓦との関連を例に「事象はつながっている」と、物事を調べる楽しさや、発見する楽しさについて説明した。



午後の研修のまとめとして、教育センター所員から百草・倉沢地区の新旧の地形図を比べて、訪問した場

所をたどり、地域の移り変わりを考えた。子供たちに地形図を比較させ、地域の変化に気づかせたり疑問を持たせたりして、学習課題を設定する方法について研修した。

(3)参加者の感想から

「書籍で調べるよりも、フィールドワークをすることにより興味を持ちやすいことが分かった。」「3年生の市内めぐりで訪問する場所にしたい。」という感想から、現場を訪ねることが大切であることについて十分理解する機会になったと考えている。また、図書館や博物館を資料収集の場所として利用することについても伝えることができた。

さらに、「写真を基に授業づくりや、学校に教材として活用できる資料づくりをしたい。」「写

真やプレゼンテーションの資料を分けてほしい。」という意見から過去の指導資料や写真データ等を教育センターのウェブサイトからダウンロードをすることができるよう整備することにした。

3 郷土教材を活用した学習活動

(1)「日野の野菜 ～おひさまのにおいいっぱいとれたてのやさい～」

- ①日野第二小学校 2 学年 生活科 実践者 吉原涼子
- ②ねらい 日野市では、様々な種類の野菜が育てられていること、その野菜が給食にも使われていることを知り、農家の人や栄養士の工夫、努力に気付くことができる。
- ③内 容 地域（川辺堀の内）の畑で栽培されている野菜を観察し、農家の指導のもと、自分たちも野菜をつくる。栄養士と連携し、日野市の野菜は旬の時期のみ作られていることに気付き、地場野菜を食べるよさに気付く。農家の人々、給食関係者へ、感謝の心を持つ。

(2)「日野の果物～梨園見学会～」

- ①東光寺小学校学校 第3 学年 社会科、総合 実践者 永江悟大
- ②ねらい 地域の梨園経営の農家と連携して、年間を通して梨園の見学・体験学習を実施し、農家の工夫・努力・思いを理解し、さらに、農家の人々の生き方に学ぶ。
- ③内 容 花粉つけから収穫、冬の手入れまで、年間を通して梨園の見学・観察を実施し、梨園農家の苦労や工夫、喜びに気付く、梨作りに対する思いや願いを知ることができた。農家に対する感謝の気持ち、食べ物を大切に作る心が育まれた。

(3)仲田の森に眠る蚕糸試験場

- ①仲田小学校 第3 学年 総合 実践者 秋田克己
- ②ねらい 仲田の森にある生物や建物等について、課題を持たせ、調べ、まとめる。地域で活躍した先人の生活や工夫と自然の大切さに気付く。地域の環境を大切にし、愛着を心情を育てる。
- ③内 容 仲田の森の桑ハウスや自然を探検し課題を設定する。蚕糸試験場の地図を手に仲田の森の秘密を探る。調べたことを仲田の森で発表する。さらに調べまとめる。

(4)小学3年生社会科見学の見どころ

- ①日野第七小学校 第3 学年 社会科、総合 実践者 木村拓郎
- ②ねらい 各校で必ず実施する3年生の社会科見学の在り方について考え、何を、どう見せるのか考察を加え、社会科見学のモデル例を提示する。
- ③内 容 1日貸切りのバスを使った例、学校周辺の徒歩で実施する例、課題別・テーマ別に実施する例を挙げて、社会科のねらいを達成するための社会科見学の在り方を示す。

(5)「平山おかぼを育てよう～平山おかぼと林丈太郎～」

- ①平山小学校 第4 学年 社会科、道徳、総合 実践者 佐野敏孝
- ②ねらい 地域の農家と連携して「平山おかぼ」を栽培・収穫する体験活動を通して、地域の伝統・文化に気付かせ、継承することの大切さを理解する。さらに、平山おかぼ創始者の林丈太郎の生き方に学び、平山小学校が平山おかぼを継承させるという意気込みを持ち、平山地域を誇りに思う心情を培う。
- ③内 容 地域の農家指導者の指導のもと、平山おかぼを栽培から収穫まで育てる体験活

動を行う。平山おかぼの創始者である「林丈太郎」の生き方に学び、郷土への誇りと愛情を育む。

「平山おかぼ」発祥の地で平山小学校の児童が、平山おかぼを受け継ぐことができた。

(6)「新しいまちづくり～多摩平の森の変化と暮らしの変化～」

①日野第五小学校 第4学年 社会科、総合 実践者 亀田貴彦

②ねらい 多摩平団地と日野第五小学校の歴史を調べ、当事の地域の人々や子どもの暮らしの様子を理解する。現在の様子と比較し、変化に気付くことができる。図書館・郷土資料館と連携して、資料を収集し授業を実践する。

③内 容 多摩平団地ができたわけ、日野第五小学校ができたわけを知り、昭和30年代の暮らしの様子を調べる。豊田駅前の発展の様子、当事の道具について調べ、生活の変化、時代背景に気付く。団地ができてからの暮らしの変化を調べこれからの町のあり方を考える。

(7)「地域の自然を知ろう～多摩平の森の自然・魅力～」

①日野第六小学校 第4学年 総合 実践者 山下智子

②ねらい 身近な「多摩平の森」の自然や歴史について観察・調査活動を行い、自ら課題を見つけ、自然や人との関わりについて調べる。地域の自然や歴史を大切にする心を育む。

③内 容 多摩平の森で自然体験学習を行い、自然や歴史について課題を持つ。自治会長、住民の方々の指導・助言を得て課題を解決していく。お世話になった方々を招き、発表会を実施する。昨年度の校内共有ファイルに、児童の活動の様子や写真・作品、単元指導計画・ワークシートが保存され見通しをもって指導ができた。

(8)「雑木林に親しもう～3年生に炭のことを伝えよう～」

①旭が丘小学校 第4学年 総合 資料提供者 中島和夫

②ねらい 学校林で雑木林の手入れや炭作りを通して昔の人の知恵を学ぶ。雑木林や炭作りで学んだことを、出前授業で3年生に伝える。

③内 容 地域の炭作り名人から、炭作りや雑木林の手入について学ぶ。雑木林で枝を集め、炭と薪をつくる。作った炭で七輪体験をする。3年生に出前授業を行い、炭について学んだこと、昔の人の工夫や努力を伝える。

(9)「武士の世の中とくらし～落川遺跡や胎内文書を活用して～」

①七生緑小学校 第6学年 社会科 実践者 小坂克信

②ねらい 源平の戦いや鎌倉幕府の始まり、元との戦いに関心を持ち、武士による政治が始まったことを理解する。地域に武士の世の中に関する歴史的な遺跡（落川遺跡）や文化財（高幡不動）があることを知り、高幡不動胎内文書（山内経之の手紙）から、武士の戦への不安や家族への思いやりに共感できる心情を育てる。

③内 容 落川遺跡の出土品（鉄器）を見て、武士の生活や武士が政治の舞台に登場する背景について考える。源平の合戦（一の谷の戦い）で平山季重と熊谷直実が先陣争いをしたことを知る。多摩地区に残る鎌倉街道の地図から鎌倉とのつながりについて考える。山内経之が戦場から家族に送った手紙を読み、内容を読み取る。落川遺跡と関連付けて「武士の世の中とくらし」をまとめる。

(10)「橋（浅川）と人々の生活」

- ①各小・中学校 社会科、総合 資料提供者 吉野美智子
- ②ねらい 浅川には6つの橋が架設されている。明治時代に架設された高幡橋・平山橋、旧日野町と七生村をつなぐ橋の建設、昭和38年日野市制後一番目の橋「一番橋」等、橋に込められた当時の人々の願いを読み取り、日野の歴史、日野の発展を考える。
- ③内 容 橋の歴史、橋の名前の由来、橋の役割等を調べ、当事の地域の人々の暮らし、仕事、願いを考える。土地利用図や年表を読み取り、町の発展を理解する。「水の郷日野」のこれからの町の在り方を考える。

VI 成果と今後の課題

(1)学習指導法の研究、指導者の育成

- ・各委員が実践した事例9件、新たに開発した郷土教材1件を「郷土日野」指導事例 第6集に掲載することができた。
- ・夏季休業中に百草・倉沢地区のフィールドワークを実施し、その教材化の演習と実践事例発表の研修会をもつことができた。
- ・研修したことを直ちに、郷土教材マップにまとめたり、2学期の社会科見学に取り入れた学校（指導者）が数校あった。
- ・今後、未開発地域でのフィールドワークを実施し、新たな郷土教材の開発を行いたい。

(2)郷土資料館・図書館との連携

- ・たくさんの指導資料、情報の提供を受け、また、専門的な見地からの指導・助言があり、効果的・効率的に郷土教材を活用した授業が実践できた。
- ・市刊行物、広報、周年記念誌、航空写真等の校内資料の散逸が指摘され、学校内の資料室等の環境整備が必要である。

(3)郷土教材の電子データ化

- ・「郷土日野」指導事例集、さらに、指導事例集の写真図版を日野市立教育センターのホームページに掲載することができた。
- ・各学校でも、郷土資料の保存・活用のため、学習指導計画や郷土資料の電子データ化の推進が必要である。

郷土教育推進研究委員会

委員長	中島 和夫	日野第一小学校校長	副委員長	秋田 克己	仲田小学校主幹
委員	會田 満	学識経験者	委員	吉野美智子	学識経験者
委員	吉原 涼子	日野第二小学校教諭	委員	亀田 貴彦	日野第五小学校教諭
委員	山下 智子	日野第六小学校教諭	委員	木村 拓郎	日野第七小学校教諭
委員	佐野 敏孝	平山小学校教諭	委員	永江 悟大	東光寺小学校教諭
委員	小坂 克信	七生緑小学校非常勤教員	委員	中山 弘樹	郷土資料館学芸員
委員	金野 啓史	市教委文化スポーツ課	委員	菅野 尚美	中央図書館司書
事務局	長崎 将幸	市教委学校課指導主事	事務局	小杉 博司	教育センター

4 基礎調査研究係

ひのっ子教育21開発委員会の研究

I ひのっ子教育21開発委員会の研究協力

ひのっ子教育21開発委員会の研究事業実施要綱によると、その目的は「日野市における学校教育の振興を図る。」とある。また組織運営の規定では、「事務局は、教育委員会指導主事および日野市立教育センター職員から構成する」とある。教育センター基礎調査研究係は、日野市教育委員会の事業である本委員会の事務局構成員として協力・支援をしてきた。

II 本年度開発委員会の研究の目的

新しい小学校学習指導要領の実施により、小学校第5学年及び第6学年にそれぞれ35時間の外国語活動が位置づけられ、4月には指導が始まる。多くの小学校では総合的な学習の時間などで「英語活動」などの形で指導されてきたが、学校間で指導内容や方法などにばらつきが見られる。また、中学校では教科として外国語（英語）を指導してきたが、現状では新たに導入される小学校の外国語活動との接続や連携を考慮しながら進めているとはいえない。そこで、小学校外国語活動を充実させるとともに、小・中学校それぞれの先生方が相互の指導内容を理解し、「中学校との円滑な接続」を考慮した指導を工夫していく必要がある。

ひのっ子教育21開発委員会は、以上の課題を受けて、本年度の研究目的を「小学校外国語（英語）活動と中学校英語（学習）教育の円滑な接続・一貫性について、授業内容「カリキュラム」及び方法の研究を行い、効果的な接続の在り方を明らかにする」とした。なお、本研究は2年間行うものであり、初年度は授業プランの作成を行い、2年目は小学校外国語活動カリキュラムを作成する計画である。

III 研究の組織、経過

指導講師 木更津工業高等専門学校 清水公男先生のご指導のもと、小・中学校校長会・副校長会の担当、各校1名の委員、事務局が集まって委員会を構成し、4つのブロックにわかれ、月1回のペースで授業実践を中心に研究を進めてきた。そして、2月10日の市立滝合小学校の外国語活動研究発表会において開発委員会としてその成果を中間報告として発表した。

IV 中間報告書について

初年度である本年度は、研究テーマに関する理論的学習と授業の実践と研究を重ねてきた。そして2月10日に、市立滝合小学校の研究発表会において、今までの研究活動の成果を「中間報告」（実践事例集）として配布し、その内容を報告した。

次ページ以降は、上記「中間報告書」のうち、概要部分を取り出してそのまま掲載した。この報告書の核になる実践事例集については、Webサイト掲載により教員がいつでも見るができるようにする予定である。

「ひのっ子教育 21 開発委員会中間報告書」より抜粋

I はじめに

平成 20 年 3 月に告示された小学校学習指導要領により、小学校第 5 学年及び第 6 学年に 35 時間の外国語活動が位置付けられた。その目標は、次の通りである。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

外国語活動の目標は次の 3 つの柱から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

小学校では、外国語に触れたり、体験したりする機会を提供することにより、中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地をつくることが求められている。しかし、実際には、小学校段階の外国語活動において、各学校で指導内容や方法などにばらつきが見られる。そのため、中学に進学した時点で、子供たちの基礎基本に違いがあり、同じスタートラインに立てない現状がある。

また、中学校では従来から教科として外国語（英語）を指導してきたが、現状では新たに導入される小学校の外国語活動との接続や連携を考慮しながら進めているとはいえない。

そこで、小学校外国語活動を充実させるとともに、小・中それぞれの先生方が相互の指導内容を理解し、中学校との円滑な接続を考慮に入れた指導を工夫していく必要がある。

日野市教育目標の一つに「ひらこう世界へ」がある。視野を世界に広げ、地球規模で考え行動することである。世界に目を向け、外国の文化を理解・尊重するとともに、郷土日野を愛する心を育てていく。そして、異文化を理解するために相互に気持ちを通い合わせ、適切な人間関係を築くことのできるコミュニケーション能力が不可欠である。このことから、本年度のひのっ子教育 21 開発委員会の活動は、日野市立教育センター事業にある「小学校外国語（英語）活動の指導力向上と中学校英語（学習）教育の円滑な接続・一貫性について、授業の内容『カリキュラム』および方法の研究を行い、効果的な接続の在り方を明らかにする」ことをねらいとして進めてきた。

これまで、外国語活動の授業のあり方について基礎的な知識や技能を学んできたことをもとに、小・中連携の視点を明確にした実践的な授業研究を行うことで、外国語活動・外国語の指導の在り方を研究してきた。ここでは、小・中連携の視点を明確にした授業づくりを進めることが重要であると考え、次の 3 つの内容についてまとめたことを報告する。

1. 小学校教員同士や、小・中学校教員の交流を密にし、お互いの授業を観る機会をもつ。
2. どの学校でも活用できる外国語活動のアクティビティ、教材や教具を提案・開発する。
3. 小・中連携の視点を明確にした授業づくりを研究し、実践事例を公開していく。

Ⅱ 外国語活動の課題と課題解決のための視点

小学校外国語活動と中学校英語の円滑な接続 小・中連携の視点を明確にした授業づくり

各学校における小学校外国語活動、中学校英語に関する課題を調べ、課題解決のための視点を次のように設定する。

小学校間で外国語活動の内容などに格差がある

小学校と中学校で教え方にギャップ（段差）がある

小学校と中学校で、お互いの授業内容がわからない



【課題解決のための視点①】

小学校教員同士や、小・中学校教員の交流を密にし、お互いの授業を観る機会をもつ。

英語ノートを授業でどうやって活用していくのか

教材の開発・準備が間に合わない

ICTを効果的に活用したい



【課題解決のための視点②】

コミュニケーションを充実させるアクティビティの工夫、教材や教具を開発・提案する。

ALT との連携をもっと効果的にしたい

担任だけで授業を進めることに自信がない



【課題解決のための視点③】

小・中連携の視点を明確にした授業づくりを研究し、実践事例を公開していく。

Ⅲ 外国語活動のねらい

1. 小学校外国語活動、中学校外国語（英語）のねらい

◆小学校外国語活動

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

目標の3つの柱

・外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める

・外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る

・外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる

コミュニケーション能力の素地を養う

外国語活動の特色

- 体験的な活動を行う … 外国語活動では、外国語を聞いたり話したりする活動を通して、言葉の面白さや習慣・文化の違いに気付かせる。
- 小・中で、ねらいが違う … 中学校では外国語の技能の定着をねらいとしているが、小学校外国語活動は定着が目的ではなく、外国語に慣れ親しませる。
- 小・中・高がつながる … コミュニケーション能力で、小・中・高の連携が求められる。

◆中学校外国語（英語）

外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

目標の3つの柱

・外国語を通じて、言語や文化について理解を深める

・外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る

・外国語を通じて、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う

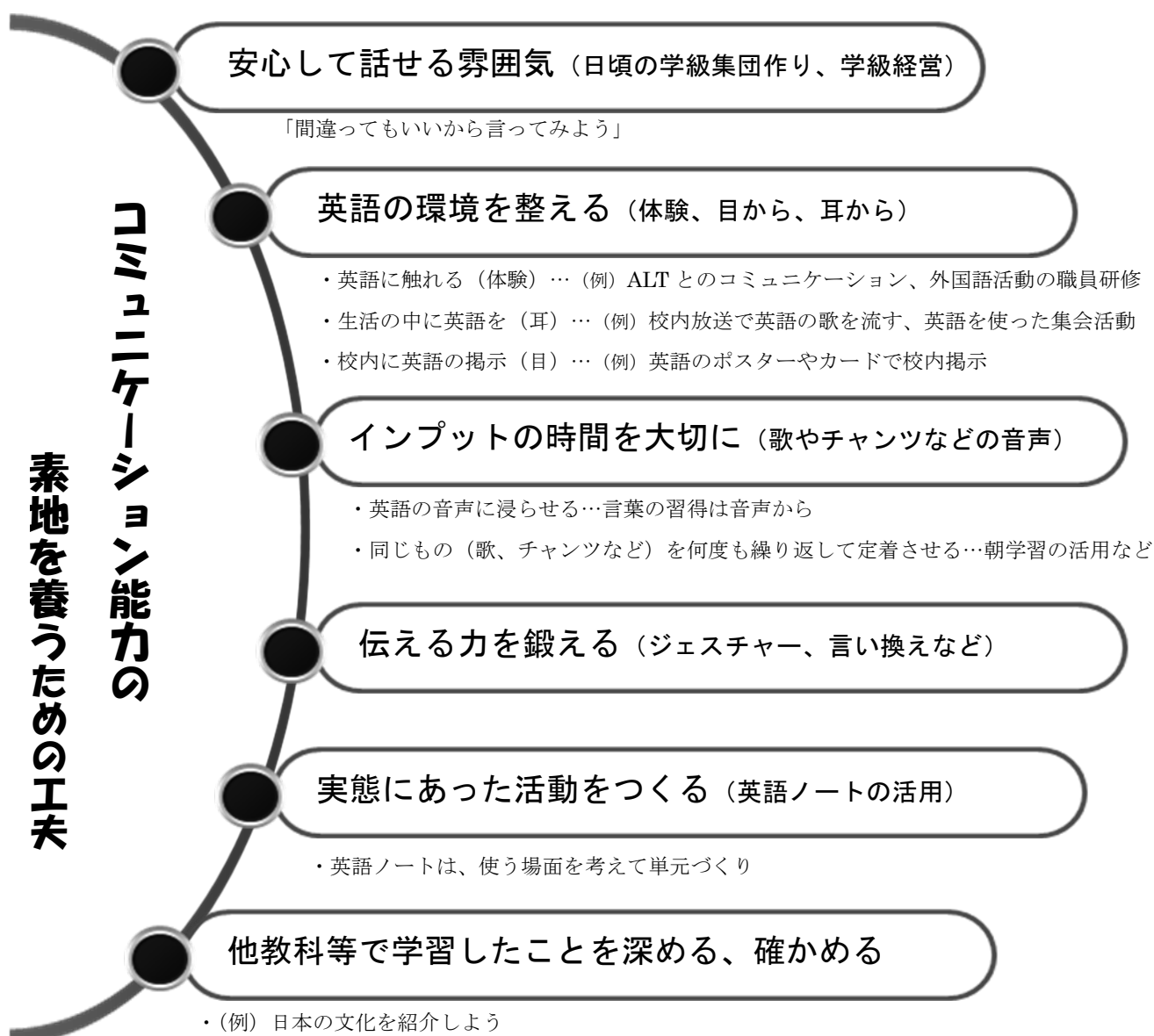
コミュニケーション能力の基礎を養う

2. コミュニケーション能力の素地を養うために

コミュニケーション能力の素地を育成するためには、コミュニケーションへの積極的な態度を身に付けることが重要である。小学校学習指導要領解説外国語活動編では、次のように述べられている。

「コミュニケーションへの積極的な態度とは、日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度などのことである。現代の子どもたちが、自分の感情や思いを表現したり、他者のそれを受け止めたりするための語彙や表現力及び理解力に乏しいことにより、他者とのコミュニケーションが図れないケースが見られることなどからも、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成が必要であると考え。」

そこで、コミュニケーション能力の素地を育成するために、次のような工夫をしていく。



【課題解決のための視点②】

コミュニケーションを充実させるアクティビティの工夫、教材や教具を開発・提案する。

アクティビティの工夫



- ✧ 外国語活動の目標にあったものであること
→コミュニケーション能力の素地を養う活動にふさわしいものである。(コミュニケーションの条件を満たすこと)
- ✧ 題材・活動について具体的なねらいがあること
→児童にどんな力をつけたいのか、どのような面を伸ばしたいのか明確である。
- ✧ 児童の実態に合ったものであること
→児童の発達段階や興味・生活、学習経験にふさわしいものである。

教材・教具の工夫



- ✧ あいさつ、歌、チャンツ、ゲームなどに効果的に活用できる教材・教具を用いる。
 - ① めあてカード：活動のめあてを黒板に貼る。
 - ② ピクチャーカード：絵・イラストと音声を結び付ける。
 - ③ 絵本：大判の絵本を用いて英語表現に親しませる。
 - ④ ペーパーサート、名札：ロールプレイを工夫する。

I C T の活用



- ✧ 52インチ電子黒板、CD、DVD、楽器を活用して視覚的效果を生かし、音声表現に慣れ親しませる。
 - ① 導入段階や場面設定のために、写真などの資料を提示する。
 - ② モニター画面のスライド表示で、フラッシュカードの役割をする。

【課題解決のための視点③】

小・中連携の視点を明確にした授業づくりを研究し、実践事例を公開していく。

1. 外国語活動の授業づくりのポイント（例）6年「行ってみたい国を紹介しよう」

◎単元について

【単元の目標】

- ・ 世界には様々な国があることを知り、世界遺産や食文化等を通して、それらに対する興味・関心を深める。
- ・ 自分の行ってみたい国について、簡単な英語を使って表現することを通して、積極的にコミュニケーションを図る。
- ・ 自分の行ってみたい国について理由とともに発表する。

・単元の全体計画を立てる

ポイント① 高学年にあった指導計画を工夫する

〈第1時〉色々な国の名前

（本時）

世界には色々な国があり、その名前や文化などを知る。

〈第2時〉どの国に行ってみ

たい？ Do you like ～？

国旗カード、食べ物カード
動物カード

〈第3時〉行きたい国を友達に

尋ねよう

I want to go to ～.

I like ～. I want to see ～.

〈第4時〉行きたい国を発表し

よう I want to go to ～.

I want to eat ～.

I want to play ～.

ポイント② 学習したことを他教科で深めたり、活用したりする

〈教科との関連～社会「日本と世界のつながり」～〉

日本とつながりのある外国を調べて、伝えよう。（ポスターセッション、プレゼンテーションなど）

ポイント③ 活動にねらいをもたせる

自分が行きたい国について発表する場面を取り上げる意図

世界の国のことを知り、伝えたいことを思い切り英語で話してみようとする意欲を育てていきたい。
また、行きたい国やその理由を考えることで、様々な国についての興味・関心も深めていきたい。

◎本時の活動について

① あいさつ（ウォーミングアップ）

② 使用表現の導入・練習 Practice

- いろいろな国名を知る。（食べ物の名前）
Japan, America, France, Korea, …

③ アクティビティ1（Collecting cards game）

- 3枚同じ国旗をそろえるゲーム
（使用表現 I get ～.）

④ アクティビティ2（Message game）

- グループで列になって国名を伝える。
（ヒントから国名を考える）

⑤ アクティビティ3（外国のことを聞いてみよう）

- スペインについて話を聞く。

⑥ 挨拶（振り返り）

どのような資質・能力を培うのかによって、
児童に意図的な支援を行う。

◎あいさつ・ウォーミングアップの活動
を通して、英語活動にスムーズに入っ
ていけるようにする。

ポイント④ 英語のスイッチを入れる

◎活動の場面やねらいを明確にして、活
動を進める。
◎本時で使用する表現やリズムをイン
プットする時間を保障する。
◎ALT や CD などを用いて、イントネー
ションやリズムに慣れるようにする。

◎ねらいにあった活動を工夫する。
◎高学年では、自己表現のできるコミュ
ニケーション活動を取り入れる。

ポイント⑤ 児童の実態とねらいに 沿った活動を取り入れる

◎外国の言葉や習慣などに興味をもた
せ、次時への意欲を高める。

◎教師が評価の視点を明確にもつこ
と、児童による自己評価を工夫する
ことなど、適切な評価を行う。

2. 小・中連携の視点に立った授業づくり

ブロックごとに小学校外国語活動と中学校英語の円滑な接続のための視点をもって研究を進める。そして、各ブロックの設定した小・中連携の視点をもとに授業づくりを行う。

【Aブロック研究テーマ】

「コミュニケーションをとりやすくするための場面設定の工夫」

- ALTやゲストティーチャーを活用する。
- インフォメーションギャップを利用したアクティビティを工夫する。
- より多くの友達とコミュニケーションを図る工夫をする。

【Bブロック研究テーマ】

「中学校のゴール地点を示し、小・中の交流を図る」

- 導入の工夫（場面や状況設定など）
- インプット、アウトプットの工夫をする。
- 授業のねらいを達成させるために、必然性のある場面を設定する。
- 活動の中の状況設定を工夫する。

【研究全体テーマ】

小学校外国語活動と中学校英語の円滑な接続

～小・中連携の視点を明確にして～

【Cブロック研究テーマ】

「コミュニケーションを楽しむためのアクティビティの工夫」

- 簡単な英語やジェスチャーを使って友達やALTと積極的に関わる
- 自然に英語で表現できるような活動の流れを工夫する。
- 自分からやろうとするアクティビティにする。
- 相手のことを尊重するマナーやルールを意識した活動にする。

【Dブロック研究テーマ】

「コミュニケーションに対する意欲的な姿勢を育てる工夫」

- 使用する語集を絞る。
- 既習事項を活用する。
- 児童・生徒の興味を高める。
- 練習の場を工夫する。
- デモンストレーションなどを動画で見せるなどICTを活用する。

ひのっ子教育21開発委員会の目指すもの

《1年目》

小・中の円滑な接続のための視点を明確にした授業プラン作成（外国語活動実践事例集作成）

《2年目》

小学校外国語活動カリキュラム作成（ひのっ子外国語活動プログラム）

V 成果と課題

1 今年度の成果

(1) 小学校外国語活動の実践授業の実施

- ・全体授業研究会を4回、ブロック授業研究会を1回行い、実践授業の積み重ねを行った。
- ・委員全員が研究テーマに基づく指導案を作成し、実践授業を行った。

(2) 小学校と中学校の指導の接続、及び連携の実践の積み重ね

- ・小学校で2回、中学校で3回の公開授業を行い、小学校外国語活動と中学校外国語の指導の接続や連携の視点から実践の評価と協議を行った。また、それによって、校種間の指導内容や指導方法の違いについて共通理解と工夫が図られた。

(3) 外国語活動、外国語における教材の情報交換と開発

- ・授業で活用できる備品、教具をブロック内の研究会で交換したり、開発したりして、指導効果を高める工夫を行うことができた。またICT活用による指導の工夫を行うことができた。

(4) 小学校外国語活動・中学校外国語の指導に関する理論的な知識の理解

- ・木更津工業高等専門学校教授 清水公男先生の熱心な指導により、小学校外国語活動、中学校英語科の指導の意義や位置付けなどの基本的な知識理解が進んだ。また、小・中の接続や教員の指導の連携の必要性やその進め方、小・連携を意識した小学校英語活動の授業作り、そして学習過程の構成やクラスルーム・イングリッシュなど授業の実際に即した指導の方法を学ぶことができた。また、先進地域の指導資料をたくさん提供していただき、視野を広めることができた。

(5) 外国語活動・外国語指導の先進的実践教員の育成

- ・日野市内の小学校・中学校から各1名、ひのつ子教育21開発委員として研究活動を行うことで、各校の外国語活動・英語科指導の中心となる教員を育成する上で一定の成果を得ることができた。

現在、小学校では外国語活動指導は土台作りの段階であるが、各校のカリキュラム作りや指導の在り方についてリーダーシップのとれる教員を育成することができた。

2 課題

(1) 小・中学校の接続を踏まえた外国語活動・外国語の学習カリキュラムの作成

- ・小学校と中学校の接続を踏まえた実践授業を行うことができたが、日野市のモデルとなるカリキュラムの作成までには至らなかった。来年度にはこれまでの実践研究の成果を踏まえて日野市内の小・中学校が活用できるカリキュラムの作成を行う必要がある。

(2) 外国語活動・外国語指導実践のための資料の開発と学校への提供

- ・今年度、研究した内容をさらに深め、整理することで、小学校外国語活動及び中学校外国語の指導資料を開発し、学校へ提供していく。

VI 研究の組織と経過

1 研究の組織

- (1) 担当指導講師 国立木更津工業高等専門学校 清水 公男教授
- (2) 研究推進組織
 - ・市立小・中学校 25校を4ブロックに分け、中学校を中心とした小・中学校の組み合わせとする。
 - ・研究の推進は、ブロックリーダー（中学校）、サブリーダー（小学校）を中心としたグループワークとして進める。
 - ・ブロックごとの研究授業・協議会には、ブロック内の学校は参加を原則とする。

2 研究の経過

- 4月26日（月） } 日野市立教育センター（全体会及び分科会）
5月10日（月） } ・講師による指導
6月28日（月） } ・小学校外国語活動、中学校英語のあり方及び接続について
7月30日（金） } ・模擬授業（外国語活動の授業イメージをつかむため）、
9月17日（金） **Cブロック提案** 実践授業・研究協議会
ブロックテーマ「コミュニケーションを楽しむためのアクティビティの工夫」
研究授業 滝合小学校第5学年 授業者 有水洋一主任教諭
- 10月12日（火） **Aブロック提案** 実践授業・研究協議会
ブロックテーマ 「コミュニケーションをとりやすくする場面設定の工夫」
研究授業 大坂上中学校第1学年
T1 大坂上中学校 斎藤朝子教諭 T2 日野第七小学校 青木ゆりか教諭
T2 日野第三小学校 波江野礼子主任教諭 東光寺小学校 堀河健吾教諭
※T1, T2：ティームティーチングの指導形態で役割を担う教員
- 11月 5日（金） **Dブロック提案** 実践授業・研究協議会
ブロックテーマ 「コミュニケーションに対する意欲的な姿勢を育てる工夫」
研究授業 旭が丘小学校第6学年 授業者 酒井千穂教諭
- 12月 9日（木） **Bブロック提案** 実践授業・研究協議会
ブロックテーマ 「中学校のゴール地点を示し、小・中の交流を図る」
研究授業 三沢中学校第2学年 授業者 浜田倫一郎教諭
- 12月17日（金） Cブロック公開授業研究会 平山中学校第1学年 授業者 樋口英美教諭
- 1月13日（木） 全体会、分科会 研究発表準備、授業実践事例集作成準備
- 2月10日（木） 研究発表会（滝合小学校研究発表と合同） 報告・分科会協議
- 3月 3日（木） 全体会、分科会 一年間のまとめと次年度への課題の設定

3 研究発表と実践事例の公開

- (1) 研究発表
2月10日に行われる滝合小学校の研究発表会
の中で中間報告を行う。
- (2) 実践事例集の作成と公開
ひのっ子開発委員がそれぞれ作成した実践事例
指導案をもとに、「外国語活動・英語科指導実践
事例集」を作成する。



【平成22年度 ひのっ子教育21開発委員会】

指導講師 国立木更津工業高等専門学校教授 清水 公男 先生

開発委員

委員長	滝合小学校	校長	岡部 君夫
委員長	日野第三中学校	校長	石村 康代
副委員長	潤徳小学校	副校長	岩崎 英夫
副委員長	日野第一中学校	副校長	高橋 清吾

各校委員 (◎リーダー ○サブリーダー)

Aブロック委員

◎大坂上中学校	教諭	斉藤朝子	○日野第一小学校	主任教諭	小沢真澄
日野第四小学校	教諭	中村友香	日野第七小学校	教諭	青木ゆりか
仲田小学校	教諭	菊地伸子	東光寺小学校	教諭	堀河健吾
日野第一中学校	教諭	大賀淳子			

Bブロック委員

◎日野第三中学校	主幹教諭	青柳玲子	○夢が丘小学校	教諭	神野幸隆
日野第八小学校	主任教諭	萩原農	潤徳小学校	教諭	松延康男
七生緑小学校	教諭	相原恵梨子	三沢中学校	教諭	浜田倫一郎

Cブロック委員

◎平山中学校	教諭	樋口英美	○日野第二小学校	教諭	鈴木進也
南平小学校	教諭	佐島祐亮	平山小学校	教諭	栢井由紀子
滝合小学校	主任教諭	有水洋一	七生中学校	教諭	笠原光史

Dブロック

◎日野第二中学校	主幹教諭	竹村きよみ	○日野第三小学校	主任教諭	波江野礼子
日野第五小学校	教諭	吉谷優見	日野第六小学校	教諭	阿部梢
旭が丘小学校	教諭	酒井千穂	日野第四中学校	教諭	上川陽子

日野市教育委員会	学校課 指導主事	佐藤 正明
日野市立教育センター	基礎調査研究係	河野 和昌

5 教育資料・広報係

I 教育資料の収集・管理及びその活用

1 教育図書、DVDソフト、ビデオソフトの選定、購入、整理

本年度の図書の選定、購入に当たっては、予算の有効活用を図るために、次の観点で所員から購入希望図書を募り、選定、購入した。

- ・ 今日的教育課題に対応して、教職員の資質向上に役立つもの
- ・ 学習指導要領の解説に準拠した指導に関するもの
- ・ 教職員の実践や研修に役立つもの
- ・ 幼稚園・小学校・中学校と偏りなく選定する方向で配慮する。
- ・ 蔵書数の少ない教科、領域に配慮する。

教育図書、DVDソフト、ビデオソフトの整理、紹介については、これまでの教職員研究室購入図書原簿を引継ぎ、「教育センター購入図書原簿」として記載するとともに、「教育センター購入図書一覧簿」「教育センタービデオ DVD ソフト一覧簿」に継続記載し、それぞれフロッピーディスクに保存している。

本年度は、特に破損した書籍・DVD、ビデオを破棄整理し、現存する書籍・DVD・ビデオを台帳との照合作業を進め、市内図書館・学校図書室との連携準備を行っている。

2 教育資料の収集、整理、及びその紹介と提供

教育資料の収集、整理に当たっては、文部科学省、東京都教育委員会、日野市教育委員会、日野市公立幼・小・中学校、各種教育研究団体の教育資料の内容（経営、教育研修、研究、学習教材、資料、その他）に関する分類記号に基づき収集し、整理している。

本年度、収集、整理した研究資料関係は、継続購読誌等を除いて、日野市公立小・中学校研究発表記録、同幼稚園・小学校教育研究会紀要、同中学校教育研究会紀要、同校長会研究シリーズ、副校長会研究収録、同小・中学校教育要覧、同特別支援教育要覧、都内他市・区教育研究所・センター研究紀要及び要覧等、提供された資料である。市内公立小・中学校道徳授業公開講座の資料、同周年行事に関わる冊子等も受け入れている。

これらの活用について、教育センター便りを通して、今年度購入の「図書」並びに「ビデオ・DVD ソフト一覧」の紹介・貸し出し方法を知らせ、その利用度を高めるよう努力してきた。

3 保存教科用図書、及び見本の整理、展示

小学校（昭和61年～平成22年）、中学校（昭和56年～平成22年）の教科用図書を記載された「教育センター保存教科書一覧簿」とそれをフロッピーディスクに整理保存し、すべての教科書を展示し、閲覧可能としている。

本年度については、5～8月にかけて平成23年度から使用される小学校教科用図書の見本の展示を行い、関係者及び市民の閲覧の機会を得ることができた。

II 広報活動

1 「教育センターだより」の企画・編集

「教育センターだより」の企画・編集・発行にあたっては、次の内容で年間3回発行し、市内公立幼・小・中学校全教職員と市内外関係諸機関に配布した。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 調査研究課題、活動計画、及びそれに関する活動状況・成果の紹介・ 学校・社会(地域)教育関係者の利用を促すもの、活動の仕方や利用・参加方法などのPR |
|--|

○平成22年度「教育センターだより」の発行内容

第21号 6月

巻頭言 教育センター所長 篠原 昭雄

調査研究部事業部

(1) ICT教育推進研究 (教育経営係) ICT活用研究委員会

委員長 信州大学教授 東原 義訓

(2)理科教育推進研究 (教科等教育係) 理科教育研究推進委員会

(3)郷土教育推進研究 (ふるさと教育係) 郷土教育推進研究委員会

委員長 日野第一小学校長 中島 和夫

学識経験者 會田 満 吉野 美智子

(4)ひのっ子教育21開発研究 (基礎調査研究係) ひのっ子教育21開発委員会

研修部

教職員の研修 (教職員研修係)

初任者研修 2・3年次研修 4年次研修 10年次研修 課題研修 夏季研修

相談部

(1)一般教育相談

(2)学校生活相談

適応指導(わかば)教室 eラーニング

第22号 11月

巻頭言 日野市教育長 米田 裕治

調査研究部

(1)理科教育推進研究 (教科等教育係) 理科教育研究推進委員会

魅力ある理科授業の展開を目指して (中間報告会中心)

(2)郷土教育推進研究 (ふるさと教育係) 郷土教育研究推進委員会

郷土の意識を育む指導のあり方～郷土の歴史・自然・文化・産業・人の教材化を通して

(3) ICT活用推進研究 (教育経営係) ICT活用研究委員会

平成23年度リース切り替えに伴う環境整備の検討

(4)ひのっ子教育21開発研究 (基礎調査研究係)

ひのっ子教育21開発委員会

小学校外国語と中学校英語の円滑な接続 ～小・中連携の視点を明確にして～

研修部

2・3年次教員授業力向上研修 4年次授業観察

相談部

(1)一般教育相談 (一般教育相談係)

(2)学校生活相談 (学校生活相談係)

不登校児童・生徒と適応指導教室「わかば教室」 eラーニング

教育資料・広報係 新しく購入した本の紹介・センターWebサイトの紹介

第23号 3月

巻頭言 日野市教育委員会指導主事 小林 邦子

調査研究部

(1) ICT活用研究 (教育経営係) ICT活用研究委員会

I C T活用による新たな学びの実践（学びのイノベーション）

先進的な研究発表会（平山小学校・日野四小学校にてタブレットパソコン使用他）

(2)理科教育推進研究（教科等教育係） 理科教育研究推進委員会

魅力ある理科授業の展開を目指して

(3)郷土教育推進研究（ふるさと教育係） 郷土教育推進研究委員会

郷土の歴史・自然・文化・産業・人の教材化を通して

(4)ひのっ子教育21開発研究（基礎調査研究係） ひのっ子教育21開発委員会

小・中連携の視点を明確にした授業づくり

研修部

日野市教育委員会主催研修会から

相談部

(1)一般教育相談（一般教育相談係）

「日野市教育相談室」の活動

本年度相談活動の充実を図るために重点的に取り組んできたこと

(2)学校生活相談（学校生活相談係）

学校生活相談「わかば教室」の活動

・教育相談活動 ・教育活動 学校・家庭・地域関係機関との連携・協力

・「eラーニング」を活用した学習支援

eラーニング利用期間と進級進学に伴うQ&A

教育資料・広報係

・図書資料室利用状況

・ホームページによる広報活動

2 教育センター紀要の発行

教育センターの調査研究事業、教職員研修活動、教育相談活動の成果と課題に関する普及・活用の促進を図るために、年に1回センター紀要を発行している。本年度の発行は、平成23年5月を予定している。

3 教育センターのWeb サイト

(1)Web サイト設置の趣旨

教育センターの設置条例の第4条で「教育の資料と情報の整備、保存及び活用に関すること」について事業がなされることが規定されている。時代の流れの中で、教育情報はインターネットをはじめとする情報ネットワークを通して、教育関係者が容易に情報を獲得し、すぐに活用できる環境を整えることが必要とされている。日野市の教育活動の充実を図るために、本教育センターも「学校等へ必要な情報を随時提供できる“情報教育センター”としての機能の充実を進めることとしている。

本年度の日野市立教育センター事業計画においては、以上を踏まえ、以下のように計画してきた。

①Web サイトや研究文書の電子化による教育センター活動の広報・普及を行う

②学校等の研究集録のWeb サイトへの掲載により、教師の授業力向上・授業支援を行う。

(2)センターWebサイトの内容

①教育センターの概要

○調査研究部・研修部・相談部事業の紹介

○教育センター紀要他バックナンバーダウンロードの紹介

現在参照できるファイル

・平成22年度教育センター要覧

・平成20年度教育センター紀要

・教育センター便り（15～22号）

・平成21年度教育センター紀要

②「郷土日野」指導事例他のダウンロード案内

③市内小中学校の「研究集録」の概要紹介

学校関係者においては、研究集録をPDF文書にした電子ファイルを提供できることも案内している。

日野第一小学校

日野第二小学校

日野第三小学校

日野第四小学校

日野第五小学校

日野第六小学校

潤徳小学校

七生緑小学校

滝合小学校

日野第七小学校

南平小学校

旭が丘小学校

平山小学校

東光寺小学校

夢が丘小学校

日野第三中学校

(3)アクセスの方法

本センターのサイトを見るには以下の2つの方法がある。

①検索サイトで、「日野市立教育センター」と入力し、アドレスを知る。

②サイトアドレス欄に、「<http://www.hino-tyky.ed.jp/center/>」を入力する。

③「日野市役所」オフィシャルサイト、「日野市ICT活用教育推進室」からのリンク



教育センタートップ画面

B 研修部の事業

1 教職員研修係



若手教員育成研修会（2月）

1 教職員研修係

I 今年度の教職員研修から ―「日野市教育委員会主催研修会」―

日野市教育委員会学校課が計画した日野市小・中学校教職員の年間の研修会について、研修係所員6名が協力体制をとってきました。以下は、市教委学校課指導主事より研修部が委託を受けた研修会一覧です。

月	日	研 修 会 名	内 容
4	9	学校組織マネジメントⅢ	日野市の教育行政（浮須勇人参事）
4	12	初任者研修連絡会	初任者・新規採用者の研修等について
4	14	学校組織マネジメントⅠ（校長）	ひのスタンダードについて（明星大学 小貫悟准教授）
4	20	初任者研修会	開講式「社会人の常識・教師の基礎基本」（浮須勇人参事）
4	21	学校組織マネジメントⅡ（副校長）	日野市の施策における副校長の役割（梶野統括指導主事）
5	18	初任者研修会	I C T活用研修
5	28	授業力向上研修Ⅱ	4年次教員研修 自己の授業の問題点の発見
6	1	授業力研修Ⅰ	2・3年次教員研修の進め方と考え方
6	8	初任者研修会	児童理解と学級経営
7	6	初任者研修会	接遇・マナー研修
7	22	人材育成と組織力の向上	富士通（株） サービスビジネス本部 清水裕子主席部長
7	23	日野市夏季教員全体研修会	いじめ・不登校への生徒指導体制づくりの3つの視点 東京理科大学大学院 八並光俊教授 ひのスタンダードを深める 国立特別支援教育総合研究所 廣瀬由美子統括研究員
7	26	郷土教育研修会	フィールドワークとまとめ
7	29	小学校外国語活動研修会	大妻女子大学・同大学院 服部孝彦教授
8	2	電流の働きの実技研修会	富士電機システムズ（株） 松本康部長
8	3	理科実験の基礎基本とデジタル教材	大成教諭・栗木教諭・増田教諭
8	4 ～6	初任者宿泊研修会	キープ・フォレストーズ・スクール 日野市教育委員会 指導主事
8	19	昆虫スキルアップ研修	多摩動物公園で体験研修（主に昆虫の飼い方）
8	20	授業力向上研修Ⅰ（2・3年次教員）	自らの授業改善について
9	9	道徳教育研修会・心の教育研修会	公開授業 仲田小学校 2年 清水裕子教諭
9	14	初任者研修会	道徳授業から学ぶ
10	19	初任者研修会	授業研究（理科） 日野第二中学校 宮田康宏教諭
11	2	人権教育理解推進委員会	講師 女子栄養大学 三木とみ子教授
11	9	初任者研修会	授業研究（社会） 日野第七小学校 葛貫祐介教諭
12	7	初任者研修会	授業研究（算数） 日野第二小学校 五十嵐優子教諭
1	18	初任者研修会	特別支援教育
2	8	初任者研修会	教育実践発表会（講師 潤徳小学校 宮崎芳子校長、 日野第二中学校 尾形斉校長）
2	25	学校組織マネジメントⅢ	今年度のまとめ（講師 日野第四中学校 枝村晶子副校長）

Ⅱ 教員の資質向上を目指す研修部の活動

教育委員会学校課が計画している日野市立小・中学校教職員の年間の研修会について、研修係所員6名が協力体制をとっている。初任者・新規採用者研修会、2・3年次教員授業力向上研修会、4年次教員授業力向上研修会、他地区とも共催して実施している10年次経験研修会等がある。これらは日野市の教職員の資質の向上（特に若手の教員など）に大きく貢献している。また、夏季休業中には夏季教員全体研修会をはじめ課題別研修会がある。今年度の全体研修会では、「いじめ・不登校への生徒指導体制づくりの3つの視点」東京理科大学大学院八波光俊教授及び「ひのスタンダードを深める」国立特別支援教育総合研究所廣瀬由美子統括研究員の講演が実施され、日野市の小・中学校教員の多数の参加があり意義ある研修が実施されていた。

1 初任者・新規採用教員研修について

平成22年度の初任者・新規採用者は小学校、中学校、特別支援学級あわせて47名である。教育センターの研修担当の研修担当6名と第一回の顔合わせ会は、4月20日に日野市教育センターで行なわれた。初任者研修会開講式後、研修担当者の自己紹介を行い、学校訪問の概要を説明する。研修担当の所員が、学校と打ち合わせの上、学期1回（年3回）学校を訪問し初任者の授業観察をした後、個別的支援・助言を行うという方法で進めている。必要な場合にはその都度、学校・初任者と連絡をとり訪問している。気軽に初任者が声を掛けられる関係を作るように努めた。2学期には、初任者・新規採用者を代表して3人の教員が研究授業を行った。

- ・10月19日 理科 日野第二中学校
- ・11月 9日 社会 日野第七小学校
- ・12月 7日 算数 日野第二小学校

2 2・3年次教員授業力向上研修について

6月1日に日野市教育センターで第一回研修会を行った。今年の研修対象教員は72名である。当日は、指導主事より2・3年次教員の研修の進め方と考え方の説明があり、授業改善について今後の進め方を相談する。2学期には研究授業を5回実施した。

I班	11月 8日	体育	日野第二小学校
II班	11月16日	道徳	日野第五小学校
III班	10月29日	体育	七生緑小学校
IV班	11月30日	特別支援	日野第八小学校
V班	11月22日	理科	大坂上中学校

3 4年次授業観察について

日野市小・中学校教員の4年次研修の対象は27名である。指導主事と研修部所員が協力体制をとり学校訪問し、授業観察を行った。その後、研修対象教員が自らの課題を明確にし、意識化し、改善の手立てを見つけられるよう指導・助言を行った。学校の授業力向上に繋がっていくものとする。

授業力向上研修Ⅰ

２・３年次教員授業研究

□ ２年次授業の事例 授業研究会（日野第五小学校）

小学校１年道徳 主題名「わがままをおさえて」の指導 について

平成２２年１１月２６日（火）

授業者 日野市立日野第五小学校

(1) 授業の概要

「進んで自分の生活を見直し、自らを節制していくこと」をねらいのもと、資料の「かぼちゃのつる」を読んで考えさせる。この資料から、わがままな行為が周りに迷惑をかける事に気付き、わがままな気持ちを抑えながら円滑な集団生活や節度ある生活をしようとする気持ちを育てようとする授業でした。



(2) 授業後の主な協議事項

- ・発問や指示の精選について、一つ一つの発問が的確で分かりやすかった。しかし、発問の数が多すぎ中心発問が分かりにくかった。発問をもっと精選したほうが良いと思う。
- ・活動時間や構成の工夫については、授業の終末の時間が少なかったのがもったいなかった。子どもの発言を板書し、振り返らせるともっと考えが深まったのではないかと感じた。
- ・教材の工夫については、今日の資料の提示は子どもにとってわかりやすかった。

(3) 研修のまとめ

子どもたちの生活実態をよく捉え、子どもの意見をしっかり引き出し、共通性を大切にしたい授業でした。課題は、資料で道徳的価値観を学習させた後、一人一人の子どもに毎日の生活の中で似たことがないか振り返らせ、子どもたちの心情をほりさげる指導上の工夫があればさらによいと思う。

□ ２年次授業の事例 授業研究会（日野市立大坂上中学校）

中学校２年 理科 「天気の変化」について

平成２２年１１月２２日（月）

授業者 日野市立大坂上中学校

(1) 授業の概要

日本付近の冬の天気図を見て、高圧帯と低圧帯から、日本の冬の天気の特徴や気象事項が起こる仕組みについて考えさせる授業でした。気象ワークシートに冬の季節風を引き起こす冬の天気の特徴について、自分の考えをまとめさせながら進めていた授業でした。



(2)授業後の主な協議事項

- ・板書の内容がわかりやすく生徒の理解を深めていた。
- ・ワークシートは生徒に授業に参加する意識を持たせるためには効果的であった。しかし、ワークシートの内容が難しいので理解ができていない子もいた。内容については吟味する必要があると感じた。

(3)研修のまとめ

- ・小学校の理科との関連を考えていく必要がある。生徒は小学校から中学校へ連続性を持って学習している。指導内容を相互に理解して授業を構成していく必要がある。
- ・教材研究に時間をかけて、理科ネットワークや映像などで生徒の理解を深める工夫があるとよかったと思う。

授業料向上研修Ⅱ 4年次教員授業観察

□ 4年次研修の事例 授業研究（日野市立日野第三小学校）

5年生 ボール運動領域「ソフトバレーボール」

平成22年10月13日（水）

授業者 日野市立日野第三小学校

(1)授業の概要

新学習指導要領では、新たに「簡易化されたゲーム」ということが明記されている。そこで、ゲームの内容を2回目ははじくのではなくキャッチすることにし、三段攻撃を容易にした。学年の実態に応じてルールを工夫することにより、攻撃や守備の作戦が立てやすくなり、チームで協力し合って課題の解決に向かって取り組める授業になった。

(2)授業後の主な協議事項

- ・教師と児童との人間関係が良好で、しっかりとした信頼関係が構築されている。その結果、一人一人の児童が熱心にゲームに取り組めるようになった。
- ・一時間の授業の流れがわかるような掲示物が用意されており、児童は見通しを持って動くことができた。
- ・ホワイトボードを活用し技能や動き方を確実に理解させる工夫をしていたのはよかった。

(3)研修のまとめ

新学習指導要領をふまえ、しっかりと計画された授業で、児童が単元全体の見通しを持って学習していた。学習の進め方の工夫、運動の内容の工夫があり、良い雰囲気の中で楽しめる体育の授業ができていた。



□ 4年次研修の事例 授業研究 (日野市立平山中学校)

中学三年生理科 2分野 地球と宇宙 1章 「地球と太陽」

平成22年11月2日(火)

授業者 日野市立平山中学校

(1)授業の概要

身近な天体の観察や観測を通して、地球の運動について考察させるとともに、太陽の特徴および太陽系についての認識を深めさせることをねらいとした授業だった。

(2)授業後の主な協議事項

- ・デジタル教材を使い、視覚に訴えた授業であり、単元の導入としては良かった。一方、情報量が多くなるので、記憶しやすいよう必要事項を記入するプリントを用意するなどの工夫があっても良かった。
- ・生徒の発言に対し、しっかりと対応が出来ていた。生徒の発言が単語に近いことが気になる。言葉できちんと表現させたいと感じた。



(3)研修のまとめ

- ・単元の導入として、生徒に興味関心を持たせるような授業であった。
- ・小学校の既習事項、言語事項など、小学校との連携を深めることも必要である。

初任者研修事業 初任教員研究授業

□ 初任者研修の事例 第二回授業研究 (日野市立日野第七小学校)

小学校4年生社会科 わたしたちの東京 東京のようすの指導について

平成22年11月9日(火)

授業者 日野市立日野第七小学校

(1)授業の概要

導入で、日野市と千代田区の人口と電車の本数を比較させ日野市と比べて人口が少ないのに、なぜ千代田区は電車の本数は多いのかを考えさせながら授業を展開していった。子どもにとって身近ではない千代田区を理解させるために、大型テレビを活用し、千代田区内の建物、道路の様子、お店などを映像で写し子どもの考えを深めていた。



(2)授業後の主な協議事項

- ・資料の選定・掲示の仕方が適切で、ICTの活用が効果的な授業であった。特に、千代田区の昼の人口を提示したタイミングが良かったので子どもの考えを深めさせることができていた。
- ・子どもの発言、つぶやきが多い活発な授業であった。予想を書かせる前に二人の子どもに発言をさせ、書けない子どもへのヒントになるような工夫がありよかった。

(3)研修のまとめ

- ・子どもたちの意見を良く引き出し、どの子にも課題解決に最後まで取り組ませている授業でした。学習のルールがしっかり身に付けさせていることが子ども同士の学び合いを可能にしていた。また、効果的な資料の提示が、子どもの「なぜ」「どうして」を喚起させることができた。

□ 初任者研修の事例 第三回授業研究 (日野市立日野第二小学校)

小学校3年生算数科 「□を使った式に表そう」の指導について

平成22年12月7日(火)

授業者 日野第二小学校

(1)授業の概要

未知の数量を□などの記号を用いて表し、文章表現どおりに数量の関係を式にする。そして、自分の考えを図や既習事項を使って説明することをねらいとした授業であった。パソコンでわからない子どもにはヒントカードを出したり、線分図を描かせたりしながら授業を進めていた。



(2)授業後の主な協議事項

- ・導入に他の先生とのロールプレイがあり子どもを引きつけていた。問題文が実際の生活に使えるような話であったのが良かった。
- ・子どもに考えさせる時間が十分にあった。しかし、子どもの発言を引き出し、みんなで議論をし、全体で深く考える時間がもっと必要であったと思う。

(3)研修のまとめ

授業では、全部の子どもにこれだけは学んでほしいとことをしっかり教えていくことが大切である。今日は、□を使った式を作ることが教えるべきことである。また、子どもが自分の考えを説明できるためには、表現力、コミュニケーション能力を算数でも培っていくことが大切である。

資 料

日野市立教育センター設置条例・施行規則

日野市適応指導教室設置要綱



「郷土教育指導事例」 4月に第6集刊行予定

設置条例・施行規則

1 日野市立教育センター設置条例

(設置)

第1条 日野市における教育の充実及び振興を図るため地方教育行政の組織及び運営に関する法律(昭和31年法律第162号)第30条の規定に基づき、日野市立教育センター(以下「教育センター」という。)を設置する。

(名称及び設置)

第2条 教育センターの位置は、日野市程久保550番地とする。

(管理)

第3条 教育センターは、日野市教育委員会(以下「教育委員会」という。)が管理する。

(事業)

第4条 教育センターは次の事業を行う。

- (1) 幼児、児童及び生徒の教育についての調査研究並びに学校教育、社会教育及び家庭教育の連携に関すること。
- (2) 教育における専門的、技術的事項の調査研究及び普及に関すること。
- (3) 学校教育及び社会教育関係者の研修に関すること。
- (4) 教育相談及び学校生活相談に関すること。
- (5) 不登校児童及び生徒に対する相談及び援助に関すること。
- (6) 教育の資料と情報の整備、保存及び活用に関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、教育委員会が必要と認める事業。

(職員)

第5条 教育センターに所長その他必要な職員を置く。

(休館日)

第6条 教育センターの休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、休館日を変更し、又は臨時に休館日を設けることができる。

- (1) 日曜日及び土曜日
- (2) 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に定める休日
- (3) 1月2日から同月4日まで及び12月28日から同月31日まで

(開館時間)

第7条 教育センターの開館時間は、午前8時30分から午後5時15分までとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、これを変更することができる。

(運営審議会)

第8条 教育センターの運営について必要な事項を審議するため、日野市立教育センター運営審議会(以下「審議会」という。)を置く。

(審議会の委員)

第9条 前条に規定する審議会の委員(以下「委員」という。)の定数は、10人以内とし、次に掲げる者のうちから教育委員会が委嘱する。

- (1) 学校教育関係者
- (2) 社会教育関係者
- (3) 教育行政機関関係者
- (4) 学識経験者

(5) その他教育員委員会が必要と認める者

(委員の任期)

第10条 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前条第1号から第3号までに掲げる者から選出された者の任期は、その在職期間とする。

3 委員が欠けた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第11条 審議会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選によりこれを決定する。

2 委員長及び副委員長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

3 委員長は、審議会を主宰する。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときはその職務を代行する。

(招集)

第12条 審議会は、必要に応じて委員長が招集する。

(議決)

第13条 審議会は、委員の半数以上が出席して成立し、その議事は、出席委員の過半数をもってこれを議決する。

(委任)

第14条 この条例の施行について必要な事項は、教育委員会が規則で定める。

付 則

(施行期日)

1 この条例は、平成16年4月1日から施行する。ただし、次項の規定は、教育委員会が規則で定める日から施行する。(日野市立教職員研究室設置条例の一部改正)

2 日野市立教職員研究室条例(平成5年条例第22号)の一部を改正する。[次のよう]略

(日野市特別職の職員で非常勤のものの報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正)

3 日野市特別職の職員で非常勤のものの報酬及び費用弁償に関する条例(昭和38年条例第13号)の一部を次のように改正する。[次のよう]略

2 日野市立教育センター設置条例施行規則

(目的)

第1条 この規則は、日野市立教育センター設置条例(平成15年条例第46号)の施行について必要な事項を定める事を目的とする。

(職員)

第2条 日野市立教育センター(以下「教育センター」という。)に所長のほか、次の職員を置くことができる。

(1) 主任研究員 (2) 事務長 (3) 専門職員 (4) その他必要な職員

(所長の任務)

第3条 所長は、上司の命を受け、教育センターの事務をつかさどり、所属職員を指揮監督する。

2 所長は、次の事項を専決する。

- (1) 教育センター運営の実施計画に関すること。
- (2) 主任研究員及び事務長の出張、研修命令及び休暇に関すること。
- (3) 教育センター全体に係わる定例的な事項に関する報告、公表、申請、照会、回答、諮問及び通知に関すること。

(主任研究員、事務長及び職員の任務)

第4条 主任研究員は、所長の命を受け、調査研究、研修及び相談業務をつかさどり、所属職員を指揮監督する。

2 事務長は、所長の命を受け、教育センターの庶務事務をつかさどり、所属職員を指揮監督する。

3 主任研究員及び事務長の専決事項については、日野市教育委員会事務局事務決裁規程（平成16年教育委員会規則第7号）第9条の規程を準用する。

4 専門職員その他の職員は、上司の命を受け、教育センターの事務に従事する。

(部及び事務分掌)

第5条 教育センターの部及び事務分掌は、次のとおりとする。

調査研究部

- (1) 学校制度及び学校経営の調査研究に関すること。
- (2) 教育課程の調査研究に関すること。
- (3) ふるさと（郷土日野）教育の調査研究に関すること。
- (4) 生涯学習の調査研究に関すること。
- (5) 教育資料の収集、提供及び教育広報に関すること。
- (6) 前号に掲げるもののほか、調査研究に関すること。

研修部

- (1) 学校教育職員の研修に関すること。
- (2) 社会教育者（地域リーダー）の研修に関すること。
- (3) 前2号に掲げるもののほか、研修に関すること。

相談部

- (1) 幼児、児童及び生徒の教育相談並びに教職員の相談に関すること。
- (2) 学校生活（適応）についての相談及び援助に関すること。
- (3) 電話等による教育相談に関すること。
- (4) 前3号に掲げるもののほか、相談に関すること。

事務部

- (1) 教育センターの庶務に関すること。
- (2) 他の部に属さない事務に関すること。

(委任)

第6条 この規則に定めるもののほか必要な事項は、教育長が別に定める。

付 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

「日野市適応指導教室設置要綱」

（目的）

第1条 この要綱は、さまざまな要因により学校生活に適応できず、長期間の欠席状況にある児童・生徒に対して社会的自立及び学校復帰の援助を図ることを目的とする。

（設置）

第2条 前条の目的を達成するために、適応指導教室を設置する。

2 適応指導教室の名称は「わかば教室」とする。

第3条 第1条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- （1）一人ひとりの児童・生徒に応じた社会的体験や学習活動を援助し、精神的な安定、好ましい人間関係、集団への適応能力、学習意欲、望ましい生活習慣等の回復を図る。
- （2）学校不適応児童・生徒の理解や対応のあり方について、学校及び保護者との相談を行う。
- （3）学校、日野市教育相談室、スクールカウンセラー、その他関係機関との連携を図る。
- （4）その他、教育長が必要と認める事業を行う。

（組織）

第4条 適応指導教室は、日野市立教育センターが所管し、指導員及びカウンセラーを置く。

（入室対象者）

第5条 入室対象者は、次の要件を満たす児童・生徒とする。

- （1）日野市公立小・中学校に在籍する児童・生徒
- （2）不登校及びその傾向にある児童・生徒
- （3）保護者及び本人が入室を希望し、日野市教育委員会教育部学校課長（以下「学校課長」という。）が認めた児童・生徒

（開設日及び開設時間等）

第6条 開設日は月曜日から金曜日とし、開設時間は9時から4時までとする。

ただし、日野市立教育センター所長（以下「センター所長」という。）が特に必要があると認めたときは、開設日及び開設時間を変更することができる。

- 2 日野市公立学校の休業日（都民の日及び在籍校の開校記念日を除く。）及び国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日は休業日とする。ただし、センター所長が特に必要があると認めたときは、この限りではない。

（通室）

第7条 通室方法や通室往復途上の安全確保については、保護者の責任において行う。

（入室・退室手続き）

第8条 入室を希望する児童・生徒の保護者は日野市適応指導教室入室願（第1号様式）を在籍校

の校長に提出する。

- 2 前項の規定による届出を受けた校長は日野市適応指導教室入室申請書（第 2 号様式）を学校課長に提出する。
- 3 学校課長は、入室の可否について、児童・生徒の在籍校の校長、指導主事及び適応指導教室指導員が協議した結果をもとに決定する。
- 4 学校課長は入室を許可した場合は、入室許可書を学校長とセンター所長に通知する。（第 3 号様式）
- 5 退室する場合は、保護者は日野市適応指導教室退出願（第 4 号様式）を在籍校の校長に提出する。
- 6 前項の規定による届出を受けた校長は日野市適応指導教室退室申請書（第 5 号様式）を学校課長に提出する。
- 7 学校課長は退室を許可した場合は、退室許可書を学校長とセンター所長に通知する。（第 6 号様式）

（学校との連携）

- 第 9 条 センター所長は在室児童・生徒について、通室状況報告書（第 7 号様式）を作成し、在籍校の校長に報告する。
- 2 在籍校の校長は、学校の教育計画や教育活動等をセンター所長に提出し学校復帰の協力をする。

（事故の対応）

第 10 条 適応指導教室の管理下で通室児童・生徒に事故が発生したときは、在籍校の校長はセンター所長からの事故報告に基づき日本体育・学校保健センターの医療費等の支給を申請する。

（委任）

第 11 条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は他に定める。

付 則

この要綱は、平成 12 年 4 月 1 日から施行する。

付 則（平成 15 年 6 月 2 日）

この要綱は、平成 15 年 6 月 2 日から施行する。

付 則

この要綱は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

編集後記

平成22年度日野市立教育センター紀要「第7集」を発刊する運びとなりました。

日野市立教育センターが開設されて、早や7年となります。これも、日野市および日野市教育委員会をはじめ各関係機関のお陰だと感謝申し上げます。

教育センターは、日野市の新たな教育課題や施策に活かし得るシンクタンクとして、調査研究部、研修部、相談部の三つの部を中心に事業を行っております。

そこで、事業内容をお知らせするため、今年度取り上げた調査・研究課題について、その方法・内容と成果を具体的にお示しする方向で、センター紀要「第7集」をまとめてまいりました。

どうぞご高覧いただければ幸いに存じます。

本年度、日野市立教育センター事業および、同紀要発刊に関して温かくご指導いただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、ご多忙のところ「教育センターへの期待」のテーマで原稿をお寄せいただきました教育長米田裕治先生をはじめ研究の趣旨などをまとめてくださった先生方に心よりお礼申し上げます。

<編集委員>

編集長
教育センター所長

篠原 昭 雄

主任研究員

浮 須 勇 人

指導主事

小 林 邦 子

事務長

渡 辺 秀 樹

教育センター所員

品 田 敏 男

教育センター所員

河 野 和 昌

教育センター所員

原 田 由美子

教育センター所員

依 田 明

教育センター所員

佐 藤 清 隆

教育センター所員

坂 井 洽 子

日野市立教育センター紀要 第7集

発行日 平成23年3月31日
発行 日野市立教育センター
所長 篠原 昭 雄
〒191-0042 日野市程久保 550
TEL 042-592-0505
FAX 042-592-1148
Eメール: k-center@city.hino.lg.jp
URL: www.hino-tyky.ed.jp/center/

